

教職大学院

Newsletter No. 100

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.7.8

「学習としての記録」:

実践省察を著し共有し、積み重ねることの意味

Newsletter の 100 号に寄せて

福井大学教職大学院 専攻長 柳澤 昌一

2008年4月、教職大学院の出発とともに刊行が始まった「教職大学院 Newsletter」。9年と3ヶ月あまりで100号を迎えることになりました。ほぼ毎月、年10回から11回の発行を続けてきたこととなります。100号にあたって、改めてこの Newsletter が、教職大学院における実践・省察とそのコミュニティにとってどのような意味と役割を果たして来ているのか、またどのような背景のもとに生まれ展開してきたのか、改めて考えていきたいと思えます。

Newsletter の働き 私たちの Newsletter は、組織活動の広報誌とも、また連絡事項を共有するための通信紙とも異なった役割を持っています。それは一人一人のメンバーが、自分自身の実践と省察の歩みを改めて問い返し、著す機会となり、それを互いに、場と時を超えて共有する媒体であるということです。そのために、インパクトのある宣伝や手短な情報共有が優先される広報紙や通信と違って、ここではそれぞれが自分の歩みをじっくりふり返り語り記すことを大切にしてきました。そしてそうした機会をなるべく多くのメンバーが分かち持つことを目指してきました。Newsletter に自分の学びの歩みとその省察を著すことは、日々の実践とカンファレンスを通して培われ編まれていく省察を、書き言葉を介してより広く長いコミュニケーション圏へとひらいていく、より深い段階へと学びを深めていくプロセスにはかなりません。

Newsletter の前史 こうした省察的な学びを深めるための、言わば学習過程共有誌の取り組みについ

ては、長い前史があります。1980年代後半以後の福井大学における教育実践に関わる協働探究のゼミナールにおいて、それぞれの探究と省察のレポートを共有する冊子を継続的に作ってきました。コミュニケーション研究・学習過程研究・探究ネットワーク。それぞれの取り組みの中で学習過程共有誌が生み出されていきました。

実践記録の歴史と「学習としての記録」 こうした学習の展開を支える学習過程共有誌という営みは、戦後の教育実践の中で培われてきた教師の実践記録、そして市民の生活記録の取り組みを背景にしています。数多いそうした記録を介した営みの中で、「学習としての記録」の営みをもっとも深く探究する協働実践として、東京都国立市公民館保育室運営会議による「保育室だより」を中心とする共同学習の展開があります。その取り組みと記録は『子どもをあずける』（未来社、1979）・『子どもを育て・自分を育てる』（未来社、1985）そしてこの取り組

目次

- 巻頭言 (1)
- 教職大学院 Newsletter100 号の歩みを振り返って(3)
- スタッフ紹介 (8)
- 院生紹介 (10)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (16)
- 月間カンファレンス報告 (19)
- 研究集会等参加報告(21)
- シンガポール訪問報告 (24)
- ISN 報告 (26)
- 世界の教師教育(29)
- スケジュール・編集後記 (32)

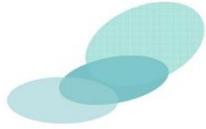
みを支えてきた公民館職員伊藤雅子氏による一連の著作によって、その30年を超える共同学習の発展過程を、私たちはいまも辿ることができます。この記録を読み解く研究を通して、「学習としての記録」という視点（実践の展開とその意味を問い直す記録を綴り著す営みをめぐる協働が実践者としての深い学習の持続的な展開を支える重要な基盤となる）、そしてそれを持続的に構成していくプロセスとサイクル、そのための組織論について学ぶこととなります。平行して進められていく大学の共同ゼミの中で、わたしたちなりにそうした視点・構成・組織を活かした学習活動を展開しながら、その意味と働きを問い直していくこととなります。附属中学校との共同研究においても、実践の省察的記録づくりが取り組みの中心となりました。『探究・創造・表現する総合的な学習』（東洋館、1999）『中学校を創る』（東洋館、2004）そして全6巻におよぶ『学びを拓く〈探究するコミュニティ〉』（エクシート、2009-2011）を著し編んでいく営みを通して、自分たちの長い実践過程を跡づけ著す省察的な記録を中心とする年報（研究紀要）の展開が生まれ、世代を超えた実践の共有と積み重ねを支える基軸として続けられてきています。

教職大学院における省察と記録のサイクル そうした積み重ねを経て、福井大学教職大学院においては学習過程の多重の記録を編み、長期実践研究報告に結んでいくサイクルを作ってきました。毎回のカンファレンスでのふり返りとその記録、半期ごとの組織的なふり返りと中期的な記録化とラウンドテーブルでの報告、そしてより開かれた読者を意識した Newsletter における表現の機会を重ねながら、実践を長期にわたって跡づけ問い返すための自分なりの記録・表現の枠組みを構成していくこととなります。読者との協働探究もまたそれにともなって発展していきます。そしてそのようにして構成され

たより長く精緻な実践把握の枠組みは長期実践研究報告としてまとめられ、以後の実践の見通しに活かされていくこととなります。私たちは多くの長い実践の歩みと省察に学びながら、自分の実践をとらえ返していく手がかりをこの記録に求めていくこと出来ます。教職大学院の新しい一年は、先輩たちの残した記録を読み解くことから始まり、自分が記録をまとめる、語ることによって締めくくられます。この長い記録、長い実践を支える重要な拠り所として、Newsletter に省察を著すこと、そしてそれを読む自分自身の実践と照らす営みが生きて働いています。

「学習としての記録」の意味を問い直す 100号におよぶ「学習としての記録」の営みの積み重ねは、10年という時間の厚みを踏まえたその過程の問い直しを私たちに求めるものでもあります。その展開をとらえ直し、専門職としての学習コミュニティを支える学びの視点・方法・組織のあり方を鮮明にとらえ直しより広く共有していくための努力が求められてきていると思います。長期的な実践とその省察を支える記録。そして省察的な談話と記録によって培われ結ばれる個々の経験と実践を超える持続的な実践コミュニティ。教育改革という営みが要する長い長い持続を念うならば、それは必要にして不可欠な媒体であり基盤であると思います。

最後に、自身の実践を問い直す記録を Newsletter に寄せてくださった皆さん、その記録を大切に読むことを通して支えてきてくださったより多くの皆さん、編集・印刷を担ってくださったスタッフの皆さんに心より感謝申し上げます。そして、101号からのまた新たな段階への挑戦に、いっしょに向かって行きたいと思います。



教職大学院 Newsletter

100号の歩みを振り返って

Newsletter No.1(2008.4.1)より

発刊にあたって

福井大学教職大学院 柳澤 昌一

私たちの共同社会の未来は、将来の主体として子どもたち、次の時代を拓く若い世代の成長に懸かっています。若い世代が協働して新しい時代を拓く力を培う場であり続けるために、学校はつねに発展を重ねていくことを求められています。そしてその発展の力は根本において学校を担う教師による協働の実践と研究の展開に拠るほかはありません。いま私たちは先人が築いてきた日本の公教育の歴史を踏まえながら、21世紀の学校：「知識基盤社会に生きる力を培う学校」を実現するという課題に直面しています。学校とそこでの協働の学びを次の段階へと進める専門職としての教師の協働の実践力が問われています。

福井大学教職大学院・教職開発専攻はこうした学校を実現する教師の協働的な実践・研究を支えることを目的に創設されました。学校の発展は、学校において、そして教師を中心とする協働の実践・研究によってこそ実現される。そうであるとするならば、その場での協働の実践・研究こそを焦点としなければなりません。だからこそ福井大学教職大学院は、学校拠点の協働研究の展開とその省察を中止しNに据えています。これまでの大学・大学院の常識とそれがいかに大きく隔

たっていたとしても、改革の中心がそこにあり、実践と研究の焦点がそこにあるかぎり、新しい大学院の基軸をそこに置くことをためらっているわけにはいきません。

このまったく新しい大学院に34人の実践者、そして20人を超えるスタッフが集まりました。このプロジェクトに期待を寄せる人たちの環は、拠点校・協力校、そして県教育委員会・各市の教育委員会、そして学校改革実践研究福井ラウンドテーブルに参加してくださったみなさんをはじめ、さらに大きく広がりを見せてきています。

この通信は、それぞれの学校、それぞれの実践と研究の拠点と拠点、コミュニティとコミュニティを結び、互いの展開を共有するもう一つのコミュニティとなることをめざしています。同時にそれはこのプロジェクトの歩みをより広く伝え、記録する媒体でもあります。この通信を通して、互いの実践とそこでの省察と展望を伝え合い、より広く提起し、新しい歴史を積み重ねていきたいと思います。学校改革への積極的な提起と深い読み取り、長い展望と広い視界を、この通信を通してともに拓いていきたいと思います。

Newsletters No.1-50(2013.6)より

発刊にあたって

福井大学教職大学院 松木 健一

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）が平成20年4月に開設されて6年目になる。年に約10号発刊してきたニュースレターは50号を越えた。ニュースレターは教職大学院の活動そのも

のである。1号から順に眺めてみると、本学の教職大学院が何を目指してきたのか、そして、何を実現でき何が課題なのか浮かび上がってくる。本書は本専攻のあゆみにとどまらず、日本の教師教育改革にお

ける学校拠点方式の教職大学院が果たしてきた役割を示す資料となろう。その評価は、後世の研究者にゆだねたい。

ところで、本専攻は「日本の教師教育改革を進めるのは、学校をベースとする教師教育制度を構築することが必須である」との教育情勢認識のもとに進めてきた。その中でニュースレターは重要な役割を果たしている。

教師の持つ実践的見識は、外部から新たな情報や知識技能を得て、積み木を積むように蓄積されるものではない。新たな事態が生じたとき教師は事故の経験を頼りに行動する。それが最も責任のとれる仕方であるからである。しかし、そう考えると年配の教師ほど適切な対処ができることになるが、現実はそのようではない。歳をとっていても適切な対処のできない教師がいることは、だれもが認めることである。この違いはどこから生じるかという点、経験についての認識の仕方が違うのである。自身の実践的見識を鍛えようとする教師は、他者の実践事例を傾聴すると、同時に自己の実践を思い浮かべている。「そうか、自分がうまくいかなかったのは、いま語ってくれている実践の〇〇の部分の欠いていたからだ！」そう思った教師には、自己の思い出したくもなかった事例が、他者の実践の認識の仕方を借りて再構成され、意味ある実践として範例化することになる。

自己の実践を語ることも同様である。同僚に語り出す中で、実践を描き出す認識のフレームを自覚化し、範例に高めていくことにつながるからである。つまり、教師は語りと傾聴という同僚との協働の中で専門性を高めることができるのであろう。学校拠点方式でなければならない理由がここにある。

ところが、1つの実践のエピソードを語り合っているだけでは、当該エピソードの持つ固有の地平から抜け出して、より普遍的な地平で議論することは難しいものである。教職大学院では、繰り上がっていく仕組みを用意している。見る・やる・語る・傾聴する・読む・書くなどのモダリティを変えながら、省察のスパンを変えていく。省察のスパンを長くすると、明日の実践をどうするかという論議から、おのずと子どもや教師自身の成長や教科の本質に目が向いてくるものである。あるいは、傾聴者の異質性を高めていく。実践を共有していない人に語り出すと思うとより根本的なところ、共有できるところから論を組み立てなければならないからである。より広範な人に知ってもらおうとするニュースレターの執筆は、この一助になっている。勿論、公教育であるから実践を公にすることは義務でもある。

本書を手に取り、各号のニュースレターを連続して眺めたとき、各号では気づかなかった新たな認識フレームと出会うことができたなら幸いである。まずは、当事者である私たち自身が、本書を用いて試みることになろう。

《巻頭言一覧》

- 第1号 (2008.04.01) 発刊にあたって (福井大学教職大学院 柳沢昌一)
- 第2号 (2008.04.27) 教職開発専攻の発足にあたって (福井大学教職大学院 専攻長 寺岡英男)
- 第3号 (2008.05.16) 新たな教師教育の幕開け (福井大学 前研究科長 黒木哲徳)
- 第4号 (2008.06.06) 開設からの2ヶ月を振り返って (福井大学大学院教育学研究科 研究科長 梅澤章男)
- 第5号 (2008.06.28) 教師は何を教えるのか (福井大学理事 中川英之)
- 第6号 (2008.10.30) 実践と実践を結ぶ新しい回路 (福井大学教職大学院 柳沢昌一)
- 第7号 (2008.11.27) 10年後を夢見て (福井大学教職大学院 副専攻長 長谷川義治)
- 第8号 (2008.12.26) 教職大学院に期待する (福井県教育庁嶺南教育事務所所長 大橋正博)
- 第9号 (2009.01.16) 一人の教員の学びは確かな教育に (福井県特別支援教育センター長 松井富美恵)
- 第10号 (2009.02.27) Time to Change (福井市至民中学校長 山下忠五郎)
- 第11号 (2009.03.31) 教師が学び合う学校をつくる
(信濃教育会教育研究所所長・東京大学名誉教授 稲垣忠彦)
- 第12号 (2009.04.24) PD, FD, そして「新しい実践研究」の可能性
(福井大学教職大学院 専攻長 寺岡英男)
- 第13号 (2009.05.23) 知の変革から存在の変革へ (日本教育大学協会・東京学芸大学長 鷲山恭彦)
- 第14号 (2009.06.26) 福井大学教職大学院に期待すること (福井県教育委員会教育長 広部正紘)

- 第 15 号 (2009.07.30) 教職大学院に期待するもの (白梅学園大学長・福井大学経営協議会委員 無藤隆)
- 第 16 号 (2009.09.30) 確かな実践を持ち寄り、力量を高め合う集団を求めて
(富山大学人間発達科学部教授 松本謙一)
- 第 17 号 (2010.11.09) 未来の学校を変えていくために (Pentti Hakkarainen・Milda Bredikyte)
- 第 18 号 (2010.01.25) 学校を「教員が学び合うコミュニティ」に変える (神奈川大学教職課程 入江直子)
- 第 19 号 (2010.02.26) 蛇行した川 (福井大学教職大学院客員教授 松田泰俊)
- 第 20 号 (2010.04.03) 専攻長の退任にあたって (福井大学教職大学院 前専攻長 寺岡英男)
- 第 21 号 (2010.04.24) 実践を「語る」「傾聴する」「書く」「読む」そして「コミュニティ」を紡ぐ
(福井大学教職大学院 専攻長 松木健一)
- 第 22 号 (2010.05.22) 学びあうことが持続可能な学校文化の形成へ (東京大学大学院教授 秋田喜代美)
- 第 23 号 (2010.06.25) 全国をリードする協働プロジェクト (福井県教育庁企画幹<学校教育> 松田通彦)
- 第 24 号 (2010.07.27) 学校のキャプテン「スクールリーダー」養成に期待
(福井県教育庁嶺南教育事務所長 岡本章)
- 第 25 号 (2010.09.30) 深い「子ども理解」から高度実践構想力へ (北海道教育大学大学院教授 庄井良信)
- 第 26 号 (2010.10.23) 未来につながる確かな歩み (福井大学医学部看護学科教授 酒井明子)
- 第 27 号 (2011.12.25) アイデンティティの時間／コミュニティの時間—長期実践研究報告の意味 (柳沢昌一)
- 第 28 号 (2011.01.31) 『気づき』 (福井県特別支援教育センター所長 小嵐恵子)
- 第 29 号 (2011.02.26) ラウンドテーブルと学び合うコミュニティ (お茶の水女子大学教授 三輪建二)
- 第 30 号 (2011.04.02) 福井大学の教師養成教育に期待する
(茨城県三浦村教育長<筑波大学名誉教授> 門脇厚司)
- 第 31 号 (2011.04.22) 板橋区における新たな教員育成の試み (東京都板橋区教育長 北川容子)
- 第 32 号 (2011.05.21) 福井大学教職大学院に思う (福井市教育委員会教育長 内田高義)
- 第 33 号 (2011.06.25) 特色を生かした学校づくり (坂井市丸岡南中学校長 坪川淳一)
- 第 34 号 (2011.07.28) 学校改革の継続性と広がりを支える専門家の学習コミュニティ
(東京大学大学院教授 勝野正章)
- 第 35 号 (2011.10.21) 教職大学院への熱い期待 (福井大学理事・事務局長 高梨桂治)
- 第 36 号 (2011.11.25) 大学と学校・教育委員会のコラボレーション再考
(大阪教育大学大学院教授 大脇康弘)
- 第 37 号 (2011.12.26) 至民中学校における教師の力量形成とそれを支える教職大学院
(福井市至民中学校校長 塚田雅洋)
- 第 38 号 (2012.02.02) 福井大学教育地域科学部附属学校園の協働研究とマネジメント
(福井大学教職大学院 森透)
- 第 39 号 (2012.02.29) 授業改善にかける板橋の熱い思い (東京都板橋区赤塚第二中学校長 稲葉秀哉)
- 第 40 号 (2012.03.03) 稲垣忠彦先生の追悼特集について (福井大学教職大学院 森透)
- 第 41 号 (2012.04.07) 山川異域 風月同天—教職大学院対処にあたって—
(福井大学教職大学院 長谷川義治)
- 第 42 号 (2012.04.21) 開設 4 年を過ぎての評価と課題 (福井大学大学院教育学研究科 研究科長 中田隆二)
- 第 43 号 (2012.05.19) ローカルな知の生成にむけて「授業研究を軸に据えた学校づくり」を支援する大学院
への期待 (東京大学大学院教授 藤江康彦)
- 第 44 号 (2012.06.23) 「修士レベル化」をどう進めるか
(中教審・教員の資質能力向上特別部会委員・北海道教育大学名誉教授 村山紀昭)
- 第 45 号 (2012.07.23) 実践研究ラウンドテーブル 2012 に参加して
(文部科学省初等中等教育局教職員課長 教員免許企画室 日向信和)
- 第 46 号 (2012.10.20) 巻頭言 (和歌山大学大学長 山本健慈)
- 第 47 号 (2012.11.17) 連携協力校の重要性 (十文字学園女子大学長 横須賀薫)
- 第 48 号 (2012.12.25) 登山が鍛える感性 (福井市安居中学校長 山本利幸)
- 第 49 号 (2013.02.16) 修士レベルの教員養成の組織改革の重要性 (静岡大学教育学部長 梅澤収)

第 50 号 (2013.03.02) 【特別寄稿】教職大学院 Newsletter No.50 記念号の学校に寄せて

新燃岳の麓から新たな教員の養成を目指して

(南九州大学人間発達学部長<元福井大学教育地域科学部長> 黒木哲徳)

「養成」「採用」「研修」の一体的な体制の構築 (福井県教育委員会教育長 林雅則)

教職大学院ニュースレターNo.50 記念号発行に寄せて

(フクビ化学工業株式会社代表取締役社長・福井経済同友会事務局代表幹事 八木誠一郎)

第 51 号 (2013.04.06) 教職大学院の活動に期待する (福井大学長 眞弓光文)

第 52 号 (2013.04.20) 和歌山での初任段階の高度化研修の取組

(和歌山県教育委員会学校教育局長 岸田正幸)

第 53 号 (2013.05.18) 改革への情熱, そしてリードへの気概 (聖徳大学副学長 増井三夫)

第 54 号 (2013.05.18) 教師教育の危機に瀕し何をなすべきか (福井大学教職大学院 専攻長 松木健一)

第 55 号 (2013.07.29) 教師教育のオルタナティブズを求めて

(国立教育政策研究所初等中等教育研究部 白水始)

第 56 号 (2013.10.19) 地域に根ざす教職大学院 (愛知教育大学教職大学院 中妻雅彦)

第 57 号 (2013.11.16) 附属/大学/大学院の三位一体の改革が教員養成を変える

(福井大学大学院教職開発専攻長 松木健一)

第 58 号 (2013.12.24) 教職大学院のさまざまな可能性と今後の課題 (福井大学教職大学院 森透)

第 59 号 (2014.2.19) 教師教育者のアイデンティティ (東京学芸大学 教授 岩田康之)

第 60 号 (2014.3.1) 「カンファレンスの学習」と Teacher Educator の課題

(武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 田中孝彦)

第 61 号 (2014.4.6) 教育改革の新しい段階—学校拠点の専門職学習コミュニティを支える教職大学院—

(福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一)

第 62 号 (2014.4.19) 教員養成改革は大学教員の資質の転換から始まる

(福井大学学長特別補佐 三位一体教育改革担当 松木健一)

第 63 号 (2014.5.17) 三位一体改革と新たな教職大学院の展開 (福井大学理事 教育・学生担当 寺岡英男)

第 64 号 (2014.6.21) 教職大学院の充実発展を願って (北海道教育大学名誉教授 村山紀昭)

第 65 号 (2014.7.21) 福井の強み分析 (国立教育政策研究所 千々布敏弥)

第 66 号 (2014.10.18) 専門職の「ダブル・ループ・ラーニング」 — ボストンの「地」でめぐる「知」 —

(福井大学教職大学院 木村優)

第 67 号 (2014.11.15) 教育研究の成果を教員養成の現場に— ティーチャーズカレッジの試み —

(コロンビア大学・ティーチャーズカレッジ 教育政策研究所 (CPRE) 研究員 長倉 若)

第 68 号 (2014.12.24) 西の端からこんにちは! (長崎大学教育学部長/大学院教育学研究科長 藤木卓)

第 69 号 (2015.2.14) 「省察」を深める実践研究 (九州大学大学院人間環境学研究院 教授 田上哲)

第 70 号 (2015.2.28) 宇都宮大が 26 番目の仲間になりました (宇都宮大学教育学部 松本敏)

第 71 号 (2015.4.4) 知識社会の対位旋律を奏でる教育の使命 (福井大学教職大学院 木村優)

第 72 号 (2015.4.18) 附属学園がスタートした (福井大学教育地域科学部附属学園 松木健一)

第 73 号 (2015.5.16) 国立大学と附属校園のミッション再考 (奈良女子大学文学部 教授 西村拓生)

第 74 号 (2015.6.26) 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2015 Summer Sessions
特集号

第 75 号 (2015.7.4) アクティブ・ラーニングを支える教員養成 ~高大接続システム改革を目指すものとその
実装のために~ (文部科学大臣補佐官 鈴木寛)

第 76 号 (2015.8.17) 教職大学院と私の研究 (仙台白百合女子大学学長 牛渡淳)

第 77 号 (2015.10.31) 「学びに向かう力」をつなぐ幼児教育研修システムの構築

(福井県幼児教育支援センター・福井県教育庁義務教育課幼児教育支援グループ主任 斎藤弘子)

第 78 号 (2015.11.14) 「絶えざる刷新を目指す」教師教育への期待 (カリタス学園・理事長 河端秀朗)

第 79 号 (2015.12.23) 学校現場ネットワークと教師の「同僚性」

(愛知東邦大学教授・教育学部長・教職支援センター長 今津孝次郎)

第 80 号 (2016.2.13) 共に前へ (長野県岡谷市教育委員会岡谷市校長会)

- 第 81 号 (2016.2.26) 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions
特集号
- 第 82 号 (2016.4.2) 福井ラウンドテーブルに参加して (白梅学園大学 教授 無藤隆)
- 第 83 号 (2016.4.30) 日々の歩みの意味を長い展望の中で問い直す (福井大学教職大学院 専攻長 柳澤昌一)
- 第 84 号 (2016.5.14) 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessionsの実施報告
(福井大学教職大学院 木村優)
- 第 85 号 (2016.5.30) マネジメントリーダーを育てる (福井大学教職大学院 三田村彰)
- 第 86 号 (2016.6.25) 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 Summer Sessions
特集号
- 第 87 号 (2016.7.23) 人口減少と地方消滅の時代における学習権保障の問題と教職大学院教育への期待
(北海道大学大学院 准教授 篠原岳司)
- 第 88 号 (2016.8.18) つながっていく学び-教職大学院の授業を見学させていただいて-
(三重大学教育学部附属教職支援センター 笹屋孝允)
- 第 89 号 (2016.10.15) 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Summer Sessionsの実施報告
(福井大学教職大学院 木村優)
- 第 90 号 (2016.10.15) Global Education through Cross-National Collaboration in Project-based Learning
(世界授業研究学会(WALS) 会長 Christine Lee)
- 第 91 号 (2016.11.12) 長野県の教員文化の水脈を耕す, 新たな教職員コミュニティの構築を目指して ~
第 1 回「信州ラウンドテーブル」を終えて ~ (信州大学教育学部附属松本中学校 副校長 賜正俊)
- 第 92 号 (2016.12.26) アフリカ「授業研究による教育の質的向上」研修を視察して
(独立行政法人国際協力機構 国際協力専門員 (基礎教育) 又地淳)
- 第 93 号 (2017.2.15) 福井大学教職大学院と赤塚第二中学校の連携について
(東京都板橋区立赤塚第二中学校 校長 宮澤一則)
- 第 94 号 (2017.2.17) 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions
特集号
- 第 95 号 (2017.4.15) 教師の「省察」を省察する
(静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 准教授 長谷川哲也)
- 第 96 号 (2017.4.14) 福井大学教職大学院を訪問して (兵庫教育大学教職大学院授業実践開発コース教員一同)
- 第 97 号 (2017.5.13) 多様な境界を越えた展開を実感した実践研究福井 ラウンドテーブル2017 Spring
Session (福井大学教職大学院 岸野麻衣)
- 第 98 号 (2017.5.13) 附属義務教育学校について (福井大学教育学部附属義務教育学校 校長 三田村彰)
- 第 99 号 (2017.6.23) 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2017 Summer Sessions
特集号
- 第 100 号 (2017.7.8) 「学習としての記録」: 実践省察を著し共有し, 積み重ねることの意味 Newsletterの
100号に寄せて (福井大学教職大学院 専攻長 柳澤昌一)

《Newsletter のあゆみ》

- 2008.4.1 Newsletter No.1 発刊
スタッフ紹介, 院生紹介, ラウンドテーブル報告, 合同カンファレンス報告, 研究集会報告, 運営
協議会報告, 免許更新制更新講習, 視察報告, 新聞掲載記事, 書評を中心に, 年間 10 号程度を発行.
- 2008.6.6 Newsletter No.6
スクールリーダー養成コースの院生の実践を紹介する「拠点校・連携校だより」がスタート.
- 2013.3.2 Newsletter No.50 発刊
- 2013.6 Newsletters (第 1 号~第 50 号合併号) の発行.
- 2014.5.17 Newsletter No.63

教職専門性開発コースの院生の取り組みを紹介する「インターンシップ／週間カンファレンス報告」がスタート.

2015.6.26 Newsletter No.74

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブルの開催にあわせたラウンドテーブル特集号の発刊開始.

2015.8 Newsletter No.76 よりメール配信開始.

2016.5.14 Newsletter No.84

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブルの報告特集号の発刊開始.

2017.7.8 Newsletter No.100 発刊

スタッフ紹介



水野 幸郎 みずの ゆきお

1966年(ビートルズ来日)4月,若狭高校3ホームの遠足は,三方町海山まで汽車とバスを乗り継ぎ塩坂越トンネルを抜けて常神半島を縦断するコースであった。リアス海岸の崖に張り付いたようないつ果るともつかないワインディングロードを山桜で有名な神子まで歩いた。ゴールは,マッチ箱のような校舎が立っている小さな広場だった。高校1年生にとっては,おとぎの国の学校のように感じられた。

1981年(56豪雪)4月,15年後に三方町立岬小学校神子分校に偶然初任者として赴任したことは,運命だと感じた。三方中学校神子分校も併設されていて,小学校1年生から中学校3年生まで総勢15名であった。教員は,分校教頭と教務主任,3年目男性教員1名,2年目女性教員2名,そして新採用女性教員2名との計8名であった。中学1年生2名の担任,中学校3年分の数学と小学校の図工を担当した。放課後は小学校4年生からの男子剣道,女子卓球の部活動指導の補助をした。教頭は,坂井町からの出向で,若い教員とともに宿舎で寝泊まりをしていた。教務主任のみ地元の人で,常神半島の先端から二番目の神子まで1時間近くかけて通勤していた。女性は自炊していたが,男性は近くの民宿で昼と夜,お世話になった。子どもたちも4時間目が終わると家に帰り昼食を取り,戻ってきた。現実 is 厳しく,小さな学校でも毎日のように事件が起こ

った。その対処と授業やその準備で1日があっという間に終わった。夜が蒸し暑くなってきたころ,職員室に皆が集まるようになった。低学年の教室では話が終わらないくらい児童の問題が起こっていた。新任の担任にこれまでいた先生から家庭の状況も含めた児童一人ひとりの状況の説明があり気を付けるべきことがアドバイスされた。保護者や地域の願いから授業のヒントまでお互いの知識と経験を共有することで学び合いが続いた。最初に出会った小さな学びのコミュニティであった。翌年,3つの本,分校が統合され岬小学校になった。小学校6年,5年を担当した後,勝山,武生,羽水の3高校で教職の大半をすごした。

2007年(10年前)4月から福井県教育研究所で三方中の2年間を挟み4年間務めた。管理職研修,5年・10年経験者研修を主に担当した。研修をデザインし,講師を務めることが推奨されており,研修で出会った慶應ビジネススクールのケースメソッドを教育に応用して初任研や5年経験者研修などで実践した。講義型から受講者参加型の研修をデザインすることに興味を持ち実践しながら組織マネジメントの理論を学習した。その後,丹南高校の3年間で学んだことを実践した。

2017年(今年)4月から福井大学教職大学院の非常勤講師として,福井県教育総合研究所のミドルリーダー養成研修に携わることになった。「校内研修におけるOJTの組織作りについて」がテーマである。50代の大量退職の時期を迎えて学校の知識や経験の伝承が喫緊の課題となっている今,受講

者が学びの中心となってチームを組織し、人と人のつながりを大切にしながら学びを深めることで知識を維持・向上することが必要であると考えた。研究所時代から興味を持ち続けた研修のデザインの機会を得て、ケースメソッドによる講義・演習を実施した。勤務した学校のスクールプランをもとに学校教育目標「『すべての教育活動を通してじりつ（自立と自律）する』を達成するためにあなたは何をしますか」の問いを立て、グループディスカッションで自校の校内研修の紹介を含む自校紹介後、一人ひとりが回答を述べ合った。結論を導くのではなく、異なる意見に耳を傾け、視野を広げ自分の回答を修正する。その後、100人近くが半円状にお互いの顔が見えるような座席配置で全体ディスカッションを始めた。グループディスカッションで自分の意見を洗練させたので、自信をもって簡潔な発言が続いた。グループでは出てこなかったような観点が多数出てきて緊張感をもって聴く姿勢が目立った。学習

面や生活面の実践や評価など様々な意見が出て、全員で貴重な考えを共有することができた。後半では、「主体的・対話的で深い学び」により目標を達成するための具体的な取り組みに発展した。最後の最後に、『学び合い』の授業改善に取り組みたいが職場では賛同を得られず悩んでいるという発言が出た。これを引き取り、アクティブ・ラーニング的な授業をするためにはカリキュラム・マネジメントが必要で、学校全体で取り組まなければならない、そのために教員どうしの学びを深める組織を形成することが必要であり、この研修を利用して小さくても良いから学びのチームを作り実践することがテーマであると研修の意図をまとめることができた。今考えれば、学校のナレッジ・マネジメントのために実践コミュニティを組織することが大切であると言いたかったのだと思う。教職大学院のスタッフとして研修の開発などに取り組むことも楽しみたいと思っている。



木水 蕨代 きみず つたよ

4月に特命職員として着任しました木水蕨代です。よろしくお願いたします。自己紹介をすると必ず、名前はなんと読むのですか？珍しい名前ですね、と言われます。正しく読まれることはほぼ皆無ですし、何だか古くさいし、自分の名前を好きになれない頃もありました。ですが今では珍しい名前である事を逆手にとって、名前をネタに相手に自分を印象づける事ができることを学び、まんざらでもなくなっています。そんな考えに変えてくれたのは高校時代のある先生のおかげでした。その先生も大変珍しい名前でしたが、絶対に忘れられないインパクトがある名前を生かしているという話をきき、目から鱗が落ちるような感覚を覚えたのを今もよく覚えています。

前職では国際協力機構（JICA）北陸支部で国際協力携わってきました。国際協力の道には青年海外協力隊に参加したことがきっかけで足を踏み入れました。当時は留学生などに日本語を教える日本語教師をしており、海外で日本語教育にかかわってみたいという理由で協力隊を目指しました。国際協力の一環ということは正直あまり意識せずに協力隊への参加を考えていました。

私は南太平洋にあるトンガという島国で協力隊員として活動しました。トンガと聞くとアフリカをイメージする人も多いようですが、琵琶湖にすっぽり入ってしまうような小さな島国です。その島国の離島ですごした2年間は、日本では決してできないような経験の連続でした。女性が優位な社会で、第3の性に寛容で、分かち合うことが根付いたトンガの社会現地の人たちと濃く関わりながら、活動をしていました。学校を例にとると、授業中にも関わらず生徒が先生の子供の面倒を見ていたり、教科書も教室も職員室もなかったりします。日本とは価値観が違い、ないない尽くしの環境の中、有るもので何ができるかを考え試行錯誤を繰り返していました。時にはトンガ人に嫌気がさしたり、時には憤ったりしながらの日々でしたが、不思議とホームシックにはならず、少しずつトンガ社会に受け入れてもらいながら、活動をしていました。2年という長いと思われる方もいますが、言葉もままならない状態でのスタートですから、相手のことを知り、自分いいたいことを伝えられるようになり、と段階をふむことを考えると、自分がやりたいことを十分にできたというより、あっという間だったと思います。決して順調なボランティア活動ではありませんでしたが、今となってはどれもいい思い出、というより私の武勇

伝となっています。武勇伝を具体的に聞いてみたいと思っただけなら、いつでも声をかけてください。

そんな経験で開発途上国の現状を知り、自分にも出来ることがあることを知り、国際協力に興味を持ち、縁あってJICAで仕事をする機会に恵まれました。JICAでの業務では様々な国を対象に教育だけでなく医療、福祉、農業、地方行政など様々な分野での支援に関わりました。専門家としてではなくコーディネーターとして日本と開発途上国を繋げる仕事は、様々な国や分野について知る機会になり、改めて日

本社会について知り考えることにもつながりました。そしてもう一つ、青年海外協力隊での経験もふくめJICAでの経験をとおして、様々な人との出会いに恵まれたことも国際協力に携わったおかげだと思っています。そんな広い人脈は頻りにやりとりをする事がなくても、いざという時に頼るといろいろな意見やアイデアを得ることができます。これまで経験で得たそれら自分の財産を福井大学教職大学院でも活かすことができたらと考えています。

院生紹介



教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

吉田 和菜

よしだ なな

はじめまして、教職専門性開発コースに入学した吉田和菜です。私は、福井県出身で、昨年度まで福井大学の障害児教育コースに在籍していました。今年度からは、福井大学教育学部附属特別支援学校の高等部でインターンとして入らせていただくことになりました。子どもたちの様子を振り返ることの大切さを、実習での毎日の記録や、学部時代に書いてきた個人誌から学んできました。しかし、私の難題として、子どもの様子の裏や、心意を読み取ることができていないこと、自分自身を客観視できないことが分かってきました。自分の子どもへの働きかけは条件反射のようになってしまっており、後に自分がなぜそのような行動をしたのか、振り返ると説明できないことがありました。子どもたちの行動の裏までを追うことができていないことで、実習ではある子が困っているところを、どうにかしようと思ひ、私はおせっかいにも似た関わりをしてしまったこともあります。しかし、その子の反応は良くなく、振り返ると私はその子の思いに寄り添って行動できていなかったと反省しました。

そして、ここ最近で気づいたことは、上の自分の難題さもあり、インターンでの日々を紹介する際に、短絡的になっていることです。記録の重要性を学部

時代に感じたが、まだどのように記録を書けばいいのか、その記録を書くために子どもの姿をどのように見ていくのかを現在模索しています。私は、自分と関わった子どもの様子を、自信をもって語れるようになりたいです。また、子どもの姿を見出すことは、自分の姿を見出すことにもつながると考えています。係わる相手とも自分とも真正面から向き合っていき、共に成長していける、そんな関係になっていきたいです。

また、私は、物事を批判的にとらえることが多いと気づきました。この物事を批判的に見るのは、自分と向き合うことを恐れているからなのかもしれません。批判をして、自分の殻に閉じこもっているのです。しかし、そんな自分が格好悪く感じ、居心地が悪いことにも気づきました。もっと、自分を見つめなおす必要があると感じました。私は、批判の仕方を考え直し、自分、そして周りの人にも有益となるものの見方、伝え方を獲得していきたいです。自分の過去を書き出すと、見えてきたこれからの課題は壁も高く道のりも長いことが分かります。また、変えようと決意したものの、方策がまだ分かっていません。これから、カンファレンスでの様々な人との意見交流、日々の自主学習の中からその方策を探っていきたいと考えています。



ミドルリーダー養成コース1年/わっか保育園

館 直宏 たち なおひろ

今年度、福井大学教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました館直宏と申します。「よくあそび よく食べ よく眠る」を自分の

保育のモットーにして明るく、楽しく、元気でたくましい子どもに育ててほしいと願い、保育をしてきました。幼い頃から農業が身近にあったこともあり野菜の栽培や加工が得意で、4歳児や5歳児の担任になった時には、身近にある食べ物が自分たちの口に入るまでにたくさんの手間隙と時間がかかっていることを感じてもらいたいと思い、子どもたちと一緒に畑を耕して土作りから始め、野菜を種から育てて収穫したり、梅干しや味噌を一年かけて作ったりしてきました。「本当にできるの？」から「できた！」までの子どもたちの表情と目の輝きから、子どもたちが持っている育つ力を感じてきました。

私は公立保育園で10年間勤めた後、現在は、私立のわっか保育園で保育士として勤務しております。わっか保育園は開園して5年目の新しい保育園で、若手の保育士が多い保育園です。「保育園の保育の質を高めるには若手の育成が重要」と考えて、保育園の中では中堅職員として若手の育成に力を注ぎ、

保育をリードしたり、一緒に考えたり、時には見守ったりしたりしてきました。

これまで子どもの育つ力を感じながら保育に取り組み、若手の育成をしてきましたが、2、3年前から「何か足りない」と自分の中に不足しているものを感じるようになりました。不足しているものは何か考えていくうちに、見出した答えは「理論」でした。これまでの保育の取り組みや若手の育成では感覚的な捉え方や伝え方が多く、理論づけて表現する意識が薄かったため、取り組みを理解してもらえなかったり、うまく伝わらなかったりして表現としても乏しかったように思います。それからは「理論づけてできて表現を豊かにしたい」「自分の保育を振り返りながら学び直したい」と思うようになり、教職大学院で学ばせていただくことになりました。教職大学院では理論を学ぶと共に、理論づけて話したり、文章化したりできる力を養って保育と若手育成の質を更に向上させていきたいと思っております。また、教職大学院の先生方、幼・小・中・高などの教育に携わる先生方と語り合っただけで現場で活かす事ができるように一生懸命取り組みたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。



ミドルリーダー養成コース1年/カリタス女子中学高等学校

長谷川 純一 はせがわ じゅんいち

はじめまして。本年度よりミドルリーダーコースに入学しました長谷川純一です。私は、2011年度より現在勤務しておりますカリタス女子中学高等学校にて非常勤講師になりました。当時は、純粹に生徒に授業を教えることが楽しく、充実した毎日を送っていました。その後、2013年度より常勤講師となり、授業だけでなく、学校行事や部活動を通して、生徒との多く関わり、授業以外の生徒たちの生き生きとした姿を見て、教師という仕

事のやりがいを更に感じました。また、それと同時に教務部でテスト時間割や監督表作成を受け持ち、生徒から見えない部分での教師の仕事があり、それがとても大変なものだと実感しました。2014年度からは担任として生徒と関わることになり、これまで以上に生徒の気持ちや考えに共感したり悩んだりすることの大切さを学びました。その後、専任講師となり授業や業務をこなし、次々と舞い込んでくる仕事を処理するのに精一杯の毎日でした。

そんな中、2016年度、本校の校長より教職大学院で学んできて欲しいと声をかけて頂きました。私は

最初、乗り気ではありませんでした。毎日の仕事がかんなんにも忙しいのに、これ以上仕事はできないと思っていました。また、高1クラス担任だったこともあり、そのまま高2クラス担任を希望していると校長に伝えると、「それくらいやる気のある方に学んで来てほしい」と、さらに勧められました。また、何を目的として学べば良いのかと尋ねると、「自分で見つけてください」とのことでした。私は、意味がわかりませんでした。しかし、改めて考えてみて、教師という仕事を続けながら、大学院で学ぶことができるというのは、とても大きなチャンスなのではないかと考え直し、教職大学院で学ばせてもらうことになりました。

そして、2017年2月のラウンドテーブルに初めて参加したとき、私は自分がいかに「井の中の蛙」であったかを知りました。自分の学校の中だけで、自分の限界を決めて、それを必死にこなしていました。

私学ということもあり、他の学校の取り組みを積極的に知ろうとせず、教育の世界での変化にも注意を払っていませんでした。多くの学校では、すでに「主体的・対話的で深い学び」という学習活動を通して、授業スタイルを積極的に変えているのに、まったく授業研究をしていませんでした。また、本校は他校に比べて電子黒板の設置数も少なく、さらに電子黒板を使いたいという教員数も少なかったのです。私は、このことに非常に危機感を覚えました。それと同時に、校長の思いも理解しました。私は、これから学校改革に向けて、大きな流れを起こさなければいけないと実感しました。これから2年間、教職大学院の大学院生として、少しでも多くのことを学び、学校に還元していこうと考えています。よろしくお願い致します。



学校改革マネジメントコース1年/奈良女子大学附属小学校

阪本 一英 さかもと かずひで

学校改革マネジメントコースで学ばせていただくこととなりました、阪本一英です。奈良女子大学附属小学校に勤務して、今年で23年目になります。私が、この教職大学院で学ばせていただくことになったのは、福井大学の連合教職大学院の構想に、奈良女子大学も参加する話が進んでいるからです。すでに、附属中等教育学校からは、数名の教諭がこの教職大学院で学ばせていただきました。遅ればせながら附属小学校からも、今年度、私を含め2名の教諭が学ばせていただきます。どうぞ、よろしくお願い致します。

さて、私が勤務しております奈良女子大学附属小学校は、たいへんな伝統を持つ学校であります。大正自由主義教育を主導した学校のひとつでもありますし、「奈良プラン」を打ち立て、戦後の新教育を主導してきた歴史も持っています。生活科や総合的な学習、主体的・対話的で深い学びなど、常にそのモデルの学校として注目も浴びてきました。大正期から一貫して揺らぐことなく、児童中心主義の教育や子どもの自律的な学びを育むことに取り組み続け

て来た学校なのです。ですから、このような奈良女子大学附属小学校が拠点校の一つとなって、教員養成のお手伝いをしていくことには、大きな意味があると考えています。戦後の日本の教育が常に目指してきた教育の、一つのモデルが私たちの学校にあり、そのモデルを実際に肌で感じながら、自分が目指す教育を考えることができるからです。

このように見えてくると、私のこの教職大学院での研究は、やはり「奈良の学習法」を見つめ直すことに他ならないのだと考えています。近い将来、私たちの学校が、教職大学院の学生をインターンとして受け入れたとき、どのような視点で学んでもらうことが重要なのか。ひいては、児童中心主義の立場から見たこれからの学校改革は、どのような視点でなされるべきなのか。そういったことをしっかりと見つめ直し、整理してまとめていくことが、この二年間の私の研究の柱になるのだろうと考えています。この三か月間のカンファレンス・ラウンドテーブルで、「学校改革マネジメント」コースで研究すべきことは何か、随分悩み続けてきましたが、現時点ではこのように考えているところです。



学校改革マネジメントコース1年/奈良女子大学附属小学校

西田 淳 にしだ あつし

はじめまして。4月より、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました。西田淳です。兵庫県宝塚市に生まれ、大学まで兵庫県で過ごし、宝塚市の公立学校で15年勤務した後、現在の奈良女子大学附属小学校に異動して9年目を迎えています。研究教科は国語です。自律的に読みすすめる子どもの育成を目指し、実践を重ねています。

本校は、大正期より、児童中心主義の「奈良の学習法」を連綿と受け継ぎ、実践を公に開いている学校です。新指導要領において「主体的・対話的で深い学び」の実現が課題とされていますが、これは「奈良の学習法」を実践することにより実現できるものと考えています。しかし、福井では堀川小学校や伊那小学校のことはよく知っておられるようですが、奈良女のことは知らないという方々も多いようです。本校のことを皆さんにお話しして興味をお持ちいただいて、研究会に参加していただける方を増やそうと思っています。こちらについてもどうぞよろしくをお願いします。

私は、研究教科が国語ということもあり、自身の実践や国語について、他校でお話させていただく機会があるのですが、特に若い先生方の、「どのようにして国語の学習をすすめればよいのか」「話す力や書く力をどのように育てればよいのか」などの悩

みに多く出合います。個人としては、子どもたちの話す、書くという場面を日常的にどれだけ設定できているのか、ということが大きな問題だと感じているのですが、他校ではカリキュラム的にも難しい問題を抱えているのだとも思います。学校改革マネジメントコースにおいて、教科指導の改善を軸にした、学校改革のあり方を考えることはできないかと思っています。

すでに数度のカンファレンス等を経て、他地域の先生方や異業種の方々のお話を伺う機会がありました。その度に思うことは、やはり相手のことをどのように理解しようとするのが大切なのだと実感します。私たちでいうと、子ども理解となります。一人ひとりの良さを見つけ、認め、そのことを伝え、愛情を持って指導すること。その重要性を改めて感じさせられます。奈良の自宅からは車で3時間半の道のりです。正直なところ「遠すぎる」のですが、それでもその距離をも上回る充実感を得ることができています。

始まったばかりで、大きな期待と共に、本当に仕事と両立していけるのか、遠距離の移動は大丈夫かと不安もあるのですが、持ち前の楽天的な性格を生かしながら、これからの教職人生に生きてはたらく研究となるように頑張りたいと思います。先生方、そして院生の皆様、ご指導のほどよろしくお願いいたします。



学校改革マネジメントコース1年/坂井市立丸岡南中学校

奥村 弘美 おくむら ひろみ

今年度、学校改革マネジメントコースで学ばせていただいております奥村弘美です。ど

うぞよろしくをお願いします。

私が現在勤務する坂井市立丸岡南中学校は、今年で開校12年目を迎える生徒数384名の中規模校です。教科センター方式、メディアスパイラルな建

物、スクエア制などの特色を兼ね備えています。また、「全職員で全生徒を見守る」というコンセプトのもと、今年度は「南中ファミリー」を合い言葉に、家族のようなあたたかい学校作りを目指しています。私も教務主任という立場から、地域に根ざした学校の在り方や学校文化の持続について目下模索中です。

私が福井大学教職大学院で学びたいと考えるようになったきっかけは、現任校で学校運営に関わる校務分掌に就かせていただいたことです。組織の運営

に主体的に関わり、協働的に職員と教育活動に取り組むことの大切さや、必要に応じて同僚に的確な支援をすることの難しさを実感しました。教職大学院で組織運営やカリキュラムマネジメントについて専門的なことを学び、学校を支える力をつけていきたい。そう考えるようになり、現在に至っています。

大学院では、月1回のカンファレンスやラウンドテーブル、集中講義を通して、学校改革に必要な様々な力をつけていくためのカリキュラムが準備されています。入学して2ヶ月で、4月、5月と合計3日のカンファレンスしか経験していませんが、すでにたくさんのことを学ばせていただいております。世代や校種を超えた多くの先生方との話し合いでは、様々な視点からの実践課題を共有したり、一緒に解決に向けて考えたりすることで、自身が抱える課題の解決の糸口が見えたり、新たな視点で物事を考え

たりすることが多々あります。もやもやしたものが次第にはっきりとしてきて、新たな実践への希望がわき起こってきます。また、カンファレンス以外にも、大学院の先生方に自校での研究の日や授業公開に参加していただいております。学校にとっても大きな支援となっています。勤務しながら大学院に通うのは大変だと言われますが、それ以上に自分にとって得るものが多く、今の私にとっては、大学院が頑張れる力を生み出せる場所となっています。

大学で学ばせていただくことに関して、周囲の皆様の多大な理解と協力に感謝しています。せめてもの恩返しとして多くのことを学び、実践に移し、現場に還元したいと思っております。2年間よろしくお祈りします。



学校改革マネジメントコース/福井大学教育学部附属特別支援学校

常廣 和美 つねひろ かずみ

附属特別支援学校6年目になる今年度、教職大学院で学ばせていただいております。教職大学院スタートの日、一番感じたことは「あたたかさ」でした。緊張の中にも、互いの状況や取組内容などを語り合うことをごく自然な流れの中で進めていきます。話し終えたときには不思議ともう何年前からの知り合いのような空気になりました。

以前は、大学院で学ぶというと「厳しさ」「辛さ」といった「根性物語」をイメージし、「失敗すれば取り返しがつかない」「周囲から認められることは難しい」などと相変わらず自信のない自分が顔を覗かせていました。県立の特別支援学校から異動した頃は不安が渦巻き、自分が主体的に取り組めそうなことは何も見つけられない状態が続きました。このように新たな環境がとても苦手で、自信を持たずにいた自分が今、教職大学院で学ぶことを決意し、そのスタートを切ってしまったのです。なぜ？何がそうさせたのか？改めて考えてみたいと思います。

ひとつは自校の研究会で大学の先生方とお話させていただくことで、自分の考えが整理される、変化するといった経験ができたこと。大学の先生方は「批判する方」ではなく「自分たちの実践と一緒に親身

に考えてくださる方」であることを感じられたのでした。ふたつめはラウンドテーブルの参加で、いろいろな校種、年代の方と語った際にどの実践も大事にし、そこから誰もが学びを得て終わった経験ができたこと。それまでは自分の考えに合わない実践は批判し、聞く耳も持たず、一方的に別の考えに擦り替えていくといったことを、自分もしてきたし、されたこともありました。まるで人格まで否定されたように感じたこともあります。しかし、ラウンドテーブルではどの実践も大事にし、さらに良いものにしていくための知恵を出し合い、相手の筋を読み解こうとします。他者の実践を聞いていた自分がいつの間にか学んでいるということは実に不思議で新鮮でした。これらの二つの経験に加え、決め手となったのは、自分が最も尊敬するある先生から教職大学院へ向けて背中を押してくださる言葉を掛けていただいたことです。

このコースで学ばせていただく中で、所属校がこれまでの研究で培ってきたことを改めて整理し、振り返り、これからの新たな道筋をどうつけていったらよいかを多面的に考えてみたいと思います。スタッフの先生方や院生の先生方と語り、じっくりと資料を読み解き、自身の取組を言葉にしていく、どの時間も大事に過ごしていきたいです。



学校改革マネジメントコース1年／小浜市立西津小学校

城谷 俊臣 しろたに としみ

本年度より学校改革マネジメントコースに入学しまし

た。出身は小浜市です。小学校も中学校も経験しました。新採用以来二十数年、学校の組織の中では若い方に属してきました。年上の年齢層の先生方が多かったため、小学校では特に年下の先生は少なかったと思います。先輩が多い分、楽をしてきた部分があります。困った時に色々とアドバイスを頂きながら、ピンチを乗り越えることができましたが、その分自分で判断する力や責任感といったものが不足していると感じます。最近急に若い世代の先生方が増えてきたことで、リーダーシップをとる場面が増えてきたため、そう感じるのかもしれませんが。自分の置かれている状況がやっと分かってきた気がします。また、自分のことだけでなく組織全体に目が向くようになったと言えるかもしれません。教職大学院に入学してから3ヶ月経ちます。具体的に学校で実践できたことは多くありませんが、色んな先生方と語り合い、自分のしてきたことを振り返る中で、自分が変わっていく実感を持っています。どちらかというと、人と話すのは得意ではありませんでしたが、時間をゆっくりとって、聴いたり話したりするうちに少しずつ自分の中の壁も低くなっていくように感じます。

7年前に小学校の研究主任として、授業力アップの研究に取り組んだ際、実践を支えるための理論を求めて本を読んだり、色んな先生に話を聞いたり、研究発表に参加したりしました。中学校では多忙な中、目の前のことだけに一生懸命になっていましたが、この時から視点が変わり、授業において大切なものを求めていくことが面白く感じられるようになりました。その後も授業研究に取り組む機会に恵まれ、自分なりに色々と考え、実践してきました。それなりにがんばってきたようにも思いました。しかし、大学院で自分のことをふり返った時、別のことが見えてきました。それは、当時は研究発表会の期限が迫ってくることで先生方の力を借りることができましたが、普段の状況では協働を生み出すことはできなかつたろうということです。理屈だけでは人を動かすことができないということも感じました。

現在は生徒指導主事、児童会などを担当していますが、興味はマネジメントに移ってきました。学校にあるものを生かしながら、地域にあるものを取り入れて、教員全員でうまく協働を生み出したいと考えています。成果が出たら、みんなで共有して喜びを実感したいと思います。どうやったら成果が出せるようになるのか、それを学びたいと思います。これから2年間、色んな先生方の話を聴いたり、聴いてもらったりすることがとても楽しみです。その中で、視野を広げ、みんなの思いを感じられるようになりたいと思います。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

語り、学び、受け継ぐ

教職専門性開発コース2年／福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程 小形 光輝

教職大学院2年目が始まって早くも3カ月が経つ。私たちストレートマスターは毎週木曜日に行われる木曜カンファレンスでインターンシップでの活動を振り返るだけにとどまらず、様々な活動をM2が企画して行っている。6月は「学校とはなに？」という大テーマで、一週目は「学校とは」、二週目は「学びとは」最終週の三週目はまとめとして「学校教育とは」を小テーマに4人程度のグループで語り合った。この大テーマの設定は、毎月担当のメンバーが中心となって決定し、カンファレンス後の会議（通称M2会議）で省察を行う。

グループ活動では企画担当であるM2が各グループでファシリテーターとなり、グループメンバーの話をつなげ、展開していく。一週目は同じM2である北本院生と共に「学校とは」をテーマにグループで話し合いを行った。話し合いの中で、学校は知識を得るだけでなく、子どもたちのコミュニケーションの場であるという答えが出た。しかし、自分の中では具体性のない結論であり、話の広がりとしては不十分であると感じていた。北本院生も「これだけではない気がする。何か足りない」と話し合いを振り返っており、次回の話し合いも踏まえ、第三週目でその「何か」を見出していくことにした。

第二週は「学びとは」というテーマで話し合いが行われた。よりマクロなテーマで話すことで、学校の在り方と教育の意味を捉えていく。私たちのグループは「学び」という言葉を「学習」や「勉強」という言葉との対比させることで考えていくことにした。すると「学習」は複数人によって行われるものであり、「勉強」は個人で行うものだという特徴が見えてきた。その中で、自分の中に吸収され、自分の能力となったその瞬間が「学び」であるという結論が出た。

第三週では、また北本院生と同じグループになり、第二週での振り返りをもとに一週目に見いだせなかった「何か」を模索した。北本院生は二週でグループメンバーの経験をもとに「学び」を探っており、理想とするものを「真似る」として、実感を持った達成感が学びに繋がると考察していた。共通する部分として、学びに向かうということは、ある目的や目標に向かって他者を観察したり模倣したりするという他者との関わりが存在すること、そして目標を達成し、それが実感として感じられる時に学びがあることに気づき、それによって何を学ぶことができるかを検討することとなった。すると服部院生が「多面的にもものを考えることに意味がある」と社会的な言葉で価値を見出した（彼は理科専門であるのに！）。最終的に、学校という場所は知識にとどまらず、人との関りの中で、自己を磨き、協働するからこそ見いだせる物事に価値を見出す場だという見解でグループの話し合いを終えた。

結論としては未だ抽象性を残すものの、北本院生は自分の中で新たな「学校」についての意味を見出していたように感じた。北本院生はグループ活動に入る前に自己のファシリテーション能力に不安を持っていた。その中で、私の未熟なファシリテートをまさに真似たりすることで話し合いに幅を持たせるよう努めていた。まさにこの場こそ学びの場であり、この活動のプロセスを授業で活かしていくことに必要性を感じる時間となった。7月からはM2だけでなく、M1も主担としてファシリテーションの経験を積んでいく。M2としてただ話し合いの内容の質を高めていき、自己の学びを深めるだけでなく、M1も含めたメンバーでの企画、運営の能力も高めていくことで、木曜カンファレンスでの活動とその学びをより価値づけていく支援をしていきたい。

カンファレンスの運営を通して見えた自分の課題

教職専門性開発コース2年／福井県福井東特別支援学校 山内 愛音

M2になり、3ヶ月が経った。M1の頃とはまた違う環境、立場に置かれ、新たな壁にぶつかっている。それは、M2が木曜カンファレンスの運営の役割を担うことだ。院生の学びを支えるため、M2で会議を行う。この会議が私にとっていろんな面で課題になっている。

会議を始めた当初は、会議の進め方も、話を深める方向も手探りで話がまとまらず、膨大な時間がかかっていた。自分の中で答えが出ないものに対して他者と議論し、よりよいものにしていくための結論を出すということの難しさを痛感した。私は教師として、他者と協働して課題を解決する力を子どもが培う手助けをしていかなければならない。しかし私自身がその力の無さを突き付けられている。何度も会議を重ねているが、未だ会議は労力や時間がかかり、毎回自分の力不足を痛感するため、正直とても憂鬱だ。しかし私にとっては、この辛く苦しいM2会議が成長する大きなチャンスになっているとも感じている。M2になり会議に参加するようになって、M1の時には理解することができず、「何のためにやっているのだろう」と思っていた木曜カンファレンスも、今は目的や意義について自分の中で少しずつ理解することができてきているからだ。それによって、M1の頃と比べると、木曜カンファレンスの重要性は高まり、充実感が増している。これらの私の理解を促してくれたのは、会議での他の院生からの意見だ。個人で考えている木曜カンファレンスに対する意見が、少しずつ擦りあわせられ、チームとしてよりよい物になっている。私はそれを聞き、木曜カンファレンスで行われる活動の意味を毎回更新させているように思う。その反面私は、他者の意見を聞くだけで完結してしまい、自分の意見を持つことから逃げてしまいがちになっている。さらに上のステップに行くため、他者の意見を受けて自分の思考をより深める、自分の意見を構築する、ということを目指して、他の院生と影響し合えるような関係を目指したい。

また、もう一つの課題として「特別支援教育」という自分の専門について考えていかなければならない。会議の中で小・中学校へインターンシップに行っている院生から「特別支援としてはどう思う？」と意見を求められることがある。他の校種と同じように活動を進めていいのか、同じグループでやっていけるのか、特別支援教育にかかわっている立場と

して答えを出さなければならない。この場面で私には迷いがある。私は教職大学院に入学した当初、特別支援教育は異校種と分け隔てて考えられるものではなく、異校種で意見交換をすることは意義のある物だと強く信じていた。しかし、木曜カンファレンスで、インターンシップで感じたことや悩みを共有する回数が増えるようになると、実際の様子を知らない人に話をしても伝わらないのではないかと、という思いが生まれてきた。さらにM2になり、木曜カンファレンスで、異校種で一つのチームを組み、協働して授業をつくるという活動について会議で考えることになった。この時に私は、異校種と授業づくりをどう展開していけばいいのか想定できず、チームを分けるべきだと思ったので、現在は特別支援を分けてチームを組んでいる。しかしその反面、これでは教職大学院に学びに来た意味がないのではないかと危機感も覚えている。私は特別支援が全く異質なものだとは思っていないつもりだし、むしろ同じ教育であることは重々わかっているつもりだ。異校種で話し、共通することの中に、教育として重要なエキスが含まれているのだろうと思う。しかし、実際に木曜カンファレンスをしていくうちに、異校種の院生の話と、自分のインターンシップでの経験を踏まえた価値観とを、どう折り合いをつけていけばいいのか分からなくなってしまうことがある。これから特別支援学校と異校種が混じり合う意義を自分の中に見つけることも、自分の課題だ。自分の中で、特別支援と異校種の折り合いが上手くつけられるようになることで、より「特別支援教育」というものを深く理解できるのだろう。これまでは、当たり前と同じフィールドで語れると思いき、何も考えてこなかったのだが、教職大学院に来たことで、異校種の中に入ったことで、違った視点を持って「特別支援教育」を捉えることができるようになるかと信じている。授業づくりの時間では、数回に1度異校種とのクロスセッションがある。こういった場で他の院生と自分の考えの共通する部分を見出し、そう思わない部分は何が要因であり、校種が関係してくるのかを見極めていきたい。異校種とかかわるようになり、より一層特別支援について考えるきっかけになっているように感じる。

教職大学院を修了するまでに、この答えに近づける何かを掴みたい。

つながる学びの種

教職専門性開発コース1年／福井市明新小学校 山岸 千尋

小学校でのインターンシップが始まって約二か月、少しずつではあるが学校生活にも慣れてきた。現在、インターンシップでは6年生に入らせていただいている。今まで、学生ボランティアや教育実習などで学校現場に入る機会はそれなりにあったが、一年間を通して行うインターンシップで一つの学級に入らせていただくことは新鮮に感じられた。その中で、見えてきた課題が二つある。

一つ目は、授業についてである。ここでは5月に行った社会科の授業実践を中心に述べていく。私は国語が専門ではあるが、社会は読書活動や国語の内容と関連付けられる部分が多いのではないかと考えたため社会科の授業をさせていただくことになった。また、教育実習ではできなかった教科の授業をしたいという思いもあり、あえて専門ではない教科に挑戦してみた。インターンシップが始まって初めての授業であったが、思い切って他の先生方や院生に見ていただくことにした。実際に多くの先生方、院生が授業を見に来てくださり一人ひとり丁寧に評価してくださった。堂々と落ち着いて授業できていたという評価があった反面、自分自身感じた課題も多くあった。時間を意識しすぎるあまり話し合いの時間も短くなってしまい、児童の様子を十分に見取れなかったことや児童に考えさせる活動が少なかったことなど数え上げればきりが無い。授業実践を行って一番深く考えたことは教科書の使用についてである。授業を行う上で教師として教科書の内容を自分で吟味しながら十分に理解しておく必要があるが、本当に教科書通りに進めていいのだろうかという思いもあった。例えば、教科書を音読する活動があるとすると、そこで児童が教科書の内容を自分なりに理解しながら読むのであれば児童の学びにつながるが、何も考えず声を出しているだけならそれはただの作業になってしまう。それは果たして意味があるのだろうか。私は教科書と児童の思いについて考えながら悶々としていた。一人で考えていてもなかなか答えは出なかった。しかし、木曜カンファレンスの午前①の時間で自分の授業実践について話す機会があった。先生方や院生に現在抱えている課題、(私の悩みなども添えて)自分が今後どのような授業を行いたいかを共有し、助言を頂くことで今後の方向性が見えてきた。他の院生も私と同じように悩んでいた

時期があったと話してくれて、「自分だけではなかったのだ。」という安心感があった。私は今まで一人で何とかしようという思いがあり、自分の悩みを他人に打ち明けることにも抵抗があったがいろいろな人と共有することで新しい学びもあった。小学校では先生方の授業を出来るだけ多く見せていただき、良い点を吸収して自分の授業に生かしていきたい。

二つ目は、児童との関わりについてである。授業でも児童との関わりはあるが、授業以外で一人ひとりとじっくり向き合えるのはインターンシップならではの経験だと思う。また、インターンシップを通して個に応じた支援をすることの難しさを実感した。例えば、児童が分からない問題に出会ったとき、「どこから分からなくなったのか」「この子にはどんな風に教えたら分かりやすいのだろうか」と考えて教えるが、それがうまくいかないこともある。個に応じた支援で特に難しいと感じたのが算数の「分数」の指導である。私は児童がただ式を書いて計算をするだけでなく、なぜこのような式になるのか説明することも重要だと思っている。そのため、児童に考えさせることを意識して指導したかったが、限られた授業時間の中でそれを行うのは難しかった。一つ一つ丁寧に児童に問いかけて考えさせる指導は大事だが、授業進度との兼ね合いもあるため状況にあった指導が求められる。視覚的情報が入ってきやすい児童、聴覚的情報が入ってきやすい児童など児童の特性もさまざまなので、私自身が教えるための引き出しを多く持つ必要があるのだと学んだ。一つ目の課題と同様に、木曜カンファレンスでも自分が感じていることを正直に言葉にしてみるだけで気持ち軽くなったように感じた。

木曜カンファレンスは自分の悩みや努力を共有する場であり、教師として人(児童や先生など)と関わるためのヒントを得る場でもあると考えている。また、インターンシップは教師の仕事や学校の役割を学ぶことができる場だと考えている。木曜カンファレンスがインターンシップを行う上での学びの種となることもあれば、インターンシップが木曜カンファレンスを行う上での学びの種となることもある。

私はインターンシップと週間カンファレンスの二つの居場所を大切に、これからの自分の学びにつなげていく所存である。

深まる学び

教職専門性開発コース1年／福井市中藤小学校 森本希美

インターンシップが始まり、2か月経った。週3回インターンシップに行かせていただき、様々なことを学ばせていただいている。毎回、自分の未熟さを痛感させられる一方で、子どもたちが成長していく姿も感じられ新たな発見もできている。4月の頃に比べると、自分がみたいこともみえてきたのもあり、少しずつ学校生活に慣れてきたように思えるが、わからないことの方がまだまだ多くみられる。

インターンシップでは、1年生にはいらせていただいている。しかし、小学校の実習の経験がない私は、どのような活動をしているのかわからずに毎回驚きの連続だった。私も1年生と同じように新しい発見の連続なようにも思える。1か月前、なにをみていこうか決まっておらず、一人ずつ子どもたちをみている中、正直方向性がみえないままインターンを過ごしていた。担任の先生と1日を通して振り返りの会話の中で、「いまは一人ずつみても良いが、本当に教師になったときには、32人全員をみていかなきゃならない。」といただい。困っている子がいれば手を差し伸べて上げることができる思いやりの強い子が多いが、そのため遅れている子に対して教えてあげるだけではなく、全て手伝ってあげるため、やってもらえると思ってしまう子もみられる。また、個人個人やりたいことを納得するまでやりたいという気持ちが強いため集団として行動するのは

まだまとまれない部分もある。私たち自身もその加減は難しいが、集団として成長していくためにはお互いに、その子自身が成長していけるようなサポートをしながらこれからみていきたい。

木曜カンファレンスでは、午前に学びの振り返りとして院生や先生方にインターンでの出来事を話しアドバイスをいただく機会などがある。自分が考えている視点とはまた違った考え方を話してくださるので、新たな考え方がそこから生まれることがあり、学びが深まっている。午後には、PISAや授業づくりを行っている。授業づくりでは、M3.M2の院生の先輩方と一緒にやらせていただくがここでもまた自分の未熟さを痛感する。最初はなにげない気持ちで授業づくりをスタートさせたが、縦のつながり・横のつながりなど他学年の教科書や指導書を見るにあたって、なぜここではこの単元をしているかなど深く学ぶことができた。

私は、2か月を通して新たな学びをしているが、これから先新たな課題が待ちうけているだろう。その課題を一人で解決するのではなく、共有しながら解決できる環境を大切にしながら受け身になってしまいうのではなく、失敗を恐れずに挑戦しながら前に進んでいきたいと改めて思う二か月間であった。

自分の素直な感覚を大事にしながら学び続けていきたい。

月間カンファレンス報告

5月13日（土）（B日程は5月20日）、今年度2回目となる合同カンファレンスが開催されました。

ちょっとリフレッシュして学校にもどっていく自分がいる

学校改革マネジメントコース2年／坂井市三国南小学校 齋藤 実紀夫

ゴールデンウィークの前後だったか、授業を終えて職員室に戻ると、教職大学院から電話があったとのメモが。何となく予感はしていたが「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマで、カンファレンスで話してくれませんか、時間は10分です。」とのこと。何か新しい視点を持てるのではないかと、実践の整理にもなるということで依頼を承ることになった。

10分ということで、10枚のスライドを用意して当日に臨んだが、対話しながらではなく一方的に、準備した内容を順序通りに整理して伝えることの何と難しいことか。担当している普通の授業では、教材と児童生徒との対話を仕組み、児童生徒同士や教師と児童生徒との対話を中心に進めており、なかなか慣れない手法ではある。月間カンファレンスの、グループセッションやクロスセッションで語り・聴き、

実践を再構築していく学びの居心地良さを改めて感じた。とはいえ、自身のビジョンを他に伝える立場になったとき、「何と難しいことか。」では済まされない。确实の共有しなければならぬのだから。今回、オリエンテーションを担当することで、「対話のない中で一方的に伝える」「準備した内容を順序通りに整理して伝える」から「聴き手との対話の中で」「最も伝えたい内容を中心に膨らませながら語る」への転換、という視点を得ることができた。何か新しい視点を持てるのではないかという予感が当たった。

その後のセッションでは、コロンビアの教育と保育園での学び・附属小学校での学校改革・私自身の実践について現状と課題を語り合う中で、個が中心になる学びから互いに学び合う文化への転換、保育園・幼稚園と小学校との接続・「学びに向かう力」の保幼小での共通理解、児童の学びを中心とした学校改革という課題の捉え直しをすることができた。私の実践に関しては、もともとあるもの(計画的に配置された体験活動や縦割り活動、地域とのつながり)の意味づけや目的の捉え直しの重要性を再確認できた。また、縦割り活動を学校文化や学び文化の伝承という視点で捉え直し、再構築していくという課題を得ることができた。

午後の「学校の組織の現状とその課題を探る」セッション。ここではまず、教員の多忙化とそれに伴うメンタルヘルスからの視点で学校組織を見たとき、「教員集団の二極化」「管理職の在り方」の問題点が提示された。風通しのよい職員室を実現するには、教員同士の関係を個またはグループ(派閥、気の合う者どうし…有機的でない)優位から、有機的なつながりのある協働する教員集団へ転換していかなければなら

ない。管理職の普段からの教員への声かけはもちろん、ベテラン教員とミドルリーダー、ミドルリーダーと若手教員、教員同士が互いに声をかけ情報を共有していくことが大切であろう。また、校長・教頭を中心として、プロジェクトごとに配置された有機的なつながりのある学校組織づくりが求められる。また、地域との連携・協働について、体育祭ボランティアや地区行事参加の事例をもとに、どこまで関わればいいのか・どのように関わればいいのか、学校教育活動との摺り合わせの課題が提示された。地域との連携・協働はそれを主(連携・協働のための学校教育活動)とするのではなく、スクールプランをよりよく実現するためにあるとの視点で、

1. 各プロジェクトがスクールプランとどうつながるか(目的)
 2. 目標を達成するためにどうするか(具体策・計画)
 3. 日々、「取組は、実践はできているか」のチェック(省察, PDCA)
 4. 目標が達成されたか(評価)
 5. 改善策をもとに、1にもどる(PDCA)
- のように地域との関係を構築し、持続可能なものにしていくことが大切であろう。

教職大学院で学び始めて、これで何回目のカンファレンスになるのだろう。今、昨年度の5月カンファレンスで「また同じことを話すのか…」と感じていた自分を思い出す。今、「同じことのように同じではない」と感じている自分がある。語り合う中で、実践をふり返り、新しい視点や転換点を見つけようとする自分がある。実践を再構築して課題を見出し、ちょっとリフレッシュして学校現場での実践にもどっていく自分がある。

協働の大切さ

学校改革マネジメントコース2年/坂井市立丸岡中学校 林 小百合

4月下旬、三田村先生からの突然の電話。5月の合同カンファレンスで、10分程度全体に話をしてもらいたいとお話だった。昨年度同じように発表された先輩方の実践をお聞きしながら、私もあんなふうに全体に話ができるまでに成長していきたいと常日頃思っていたが、あまりにも突然のお話で「はい、わかりました。」と電話を切った後も動揺していた。しかし、このような機会は滅多にあるものではない。大学院の先生方や他の院生に1年間の取組を語ることで、自身の実践の歩みを振り返り、捉え直すことができるのではないかと考え、前向きに取り組むことができた。

当日は、大学院の先生方や院生に加え、県外からの派遣教員11名の先生方も参加されており、少々緊張した。しかし、昨年1年間小中連携による「魅力ある学校づくり」に取り組むなかで、大きな壁にぶつかりながらも右往左往しながらようやく研究の方向性を見いだすことができた素直な思いや、協働することの大切さについて少しは伝えられたのではないかと思う。そして、なんと言っても、多くの先生方に自分の実践を聴いていただけたという喜びは計り知れなかった。あんなにも多くの先生方が私の話熱心に耳を傾けてくれたからこそ、私自身も安心して話ができ、思いを共有してもらえたという喜

びを感じる事ができたのだろう。人は、熱心な聴き手がいる環境であれば安心して自己開示ができるものではないだろうか。毎月のカンファレンスやラウンドテーブル、集中講義で、取組がうまくいかなければ心の内を素直に出せたのも、常に熱心に耳を傾けてくれる先生方がいらっしやっただからである。教職大学院という安心して学べる環境が、生徒にとっての教室であり、なおかつ学校でなければならないのではないかと改めて強く感じた。このような気づきと、素晴らしい学びの機会を与えてくださった教職大学院の先生方と三田村先生に、心から感謝申し上げたい。

4月は例年のごとく人事異動によって教職員が変わり、組織のメンバーが変わる。生徒も同じである。どの学校でも新入生を迎え、ほとんどの学年がクラス替えによって児童生徒のメンバー構成も変わる。そう考えると、学校という組織は変化の激しい社会なのかもしれない。今回のカンファレンスでは、6人の院生の方々と同じグループで語り合った。どの先生も組織のメンバーが様変わりした新たな環境の中で、学級を、そして学校という組織をどうマネジメントしていけばより機能するかについて探っておられたように思う。新たな年度がスタートして間もないこの時期は、組織が軌道するまでの大切な準備期間である。人が変わり組織も変化した学校で、それぞれの組織にどう働きかけるべきか、組織をどう動かすと機能するかについて、どの先生も考えておられた。そして、他の教員との協働の中でその解決への糸口を見つけ出そうとしていた。同じ学校の教職員と、他の学校の教員と、外部の関係機関と、そ

して PTA や地域の方々と協力し、協働することが大きな気づきや発見につながるものである。違う立場の人との語り合い、このようなコミュニティの中から、組織を動かす重要なヒントが得られるのではないだろうか。

今年度、私は研究主任に加え教育相談を担当することになった。相談室を利用する生徒やその保護者と毎日かかわっているが、それぞれが抱える悩みや問題は多岐にわたっている。担任や学年、教育相談だけでは思うように進展せず、次への足がかりを見いだしたいときに、スクールカウンセラーや適応指導教室、スクールソーシャルワーカー、市教委からのアドバイスは本当にありがたい。一人の生徒の成長を願って複数の人がかかわり、支えていくことの大切さを、教育相談の立場に携わって再確認できた。これも協働のひとつではないだろうか。

学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望を語り合った6人の院生の方々。言葉のひとつひとつに、学校現場での実践が鮮やかに映し出されている。そして、その実践に裏付けされた言葉ひとつひとつが、自然と私自身の実践とつながり、心の中にしみこんでくるようだ。教職大学院でのこの学びが、学校での毎日の活動を意味づけ、明日からの実践の新たな視点への気づきにつながり、協働研究の様々な歩みが、私自身の実践に大きな意味をもっている。また明日から、「魅力ある学校づくり」改革にむけ、様々なコミュニティに揺さぶりをかけ、コミュニティ同士をつなぐ立場として歩んでいきたい。

研究集会等参加報告

カリタス学園の研究会に参加して

福井医療大学 森 透

去る6月20日(火)からカリタス学園の幼稚園・中学高等学校・小学校と連続して3日間、公開授業と研究会に参加させていただきました。今まで何度も参加させていただいていますので知り合いの先生方も多く、気楽な感じで楽しんで参観させていただきました。

1 カリタス幼稚園

6月20日(火)朝9時から夕方5時過ぎまで一日参観させていただきました。福井大学からは松木先生、荒木先生、中島先生、教職大学院生の前田先生、それに私の5名でした。園長先生がこの4月から今までの小池先生から菅原先生に交代されたのですが、

菅原先生は初めてお会いする先生で、長くカリタス学園におられモンテッソーリ教育を幼稚園に導入された先生とのことでした。研究テーマは「見たい、知りたい、やってみたいに応えて」です。

朝は9時から10時頃まで「自由遊び」で、園庭を中心に子どもたちは思いっきり遊んでいました。砂場遊び、遊具、サッカー、追いかっこ、などなど、子どもらしい自由な運動遊びが続けられていました。

10時からは教室に入り「モンテッソーリ教育」です。教職大学院院生の横澤先生のクラスに入らせていただきました。10時までの「自由遊び」と10時からの「モンテッソーリ教育」への連続性と発展性が

みられればといつも思っています。先日の6月25日（日）に開催された福井大学ラウンドテーブルで横沢先生からの実践レポートをいただきましたので、今回それを読ませていただき、感想を書くことにしました。タイトルは、**横澤朋「自然と子どもたち～28年度・29年度の保育実践から～」**（ラウンド資料2017.06.25.全24頁）です。A4サイズで24枚もあり、なかなか読みごたえがありました。この実践レポート全体の第一印象は、子どもたちの自主性・主体性・意欲にそいながら、子どもたちと活動を創る、まさしく「総合学習」だと思いました。横澤先生はしばしば「総合学習」ではないと言われていたのですが、子どもの興味や関心を大事にして子どもの思いに寄り添いながら活動を創造していく取り組みは試行錯誤の連続で、まさしく「総合学習」だと私は思うのです。今後、モンテッソーリ教育と総合学習の関連性・発展性について考えることが大事ではないかと思っています。横澤先生のテーマは「自然探索」で、幼稚園や中高のグラウンド、野菊の家の庭などにある果実の樹木を年間を通して継続して観察し、発見し、教室で果実を切ったり触れ合う。季節の変化にも敏感に反応している子どもたち。発見と感動と気づきを大事にしている実践はすばらしいと思いました。

この横澤先生の実践記録を読みましたので、改めて6月20日の公開保育の実践の意味を考えてみました。いろいろな課題はあるとは思いますが、私としては自然をテーマとした「総合学習」の実践であると考えました。カリタス小学校の先生方がこの実践記録を読まれたら、きっと共感するのではないかと思います。横澤先生は自然探索の取り組みの中に、自然な形で「モンテッソーリ」の教具を入れていました。一般的にモンテッソーリ教育に対して非連続な形で外部から一方的に持ち込むという批判があるようですが、この横澤実践は違うのではないかと思います。今後の検討課題にしましょう。

午後の研究会はモンテッソーリ教育についてが中心話題になりましたが、子どもたちの自主性・主体性・意欲を大事にしていく方向性が議論され共有されたように思いました。今後も考えていきたいテーマだと思います。

2 カリタス中学高等学校

6月21日（水）には11時35分から教職大学院1年生の長谷川純一先生の中学校数学の授業でした。参観者は松木先生・中島先生・花井先生、それに私の4名でした。資料は、「中学校数学科学習指導案」・単元名「相似の中心（幾何）」で、第4校時と第6校時に2年1組（20名）と2年2組（20名）に同じ内容の授業が行なわれました。テーマは相似形です。一番面白かったのは数学の世界を日常の生活世

界に下ろした点でした。写真でカリタス学園中高の建物での相似形（校長先生の登場！）を考え、次にカリタス校舎とランドマークタワーの距離と相似形の関係を考える授業でした。4人グループで試行錯誤しながら、活発に議論しているグループと静かなグループがありました。最終的に、この単元の内容が2クラスの各20名の生徒たちが全員理解されたかどうかは課題として残ったように思いましたが、長谷川先生のチャレンジングな授業の面白さは非常に感じました。夕方の全体研究会ではグループで初めての先生方と楽しく語り合うことが出来ました。さらに、夜の懇親会でも初対面の先生方とお酒を酌み交わし、自由に語りあうことができるととても幸せな気分になりました。

3 カリタス小学校

6月22日（木）13時15分から程島先生の1年3組の国語科「たまがわたんけん」の授業でした。参観者は松木先生、中島先生、教職大学院生の伊藤先生、それに私の4名でした。程島先生は昨年度6年生の担任で歴史の授業を参観させていただいたことがあり、優しい先生の印象があります。1年生の授業はなかなか難しい面があり、グループ学習でどこまで自分の思いを伝えられるかという点です。学校近くの多摩川へ2回探検にいき、いろいろな発見をしてきた感動をグループで語り合うという授業でしたが、率直な感想としては、5月12日と6月7日の2回の多摩川探検での発見や感動を思い出しグループのほかのメンバーに伝えることがどこまでできるかという点が難しいと感じました。授業日は6月22日なので探検日からだいぶ時間が経過しています。例えば廊下に貼ってある多摩川探検の写真や模造紙を教室に持ち込み、リアルに当時の探検の感動を思い起こすことがもう少し出来れば話し合いがもっと活発になったのではないかと思います。この点は授業後の研究会でも話されましたが、研究会は同じグループを見ていたメンバーでもたれ、いつも感心しますが、率直な感想・意見が出され、各グループでの省察を順番に確認しようというやり方でした。カリタス小学校のワークショップ研究会の深さを改めて感じました。

3日間、本当にお世話になり、まことにありがとうございました。今回参観させていただき、子どもの思いに寄り添う、子どもの自主性・主体性を大事にするという点は、幼稚園・小学校・中学高等学校を貫いて共通に認識されたように思いました。形は、「総合学習」「モンテッソーリ教育」「教科」という実践軸であっても、それらに共通する基盤である視点はカリタスとして共有化できるのではないかと感じた研究会でした。

シンガポール訪問報告

Going Beyond Borders: March 2017 Singapore Visits

福井大学教職大学院 Pauline Anne Therese M. Mangulabnan

University of Fukui's Department of Professional Development of Teachers visited Singapore schools two times in March 2017. The first trip was composed of Yanagisawa sensei, Kimura sensei, Hayase sensei, Hartmann sensei and myself. On March 6 and 7, we visited the National Institute of Education and had separate meetings with the Office of Teacher Education (OTE) and with Prof Christine Lee of the Curriculum, Teaching and Learning (CTL) department. On the first occasion, DPDT and OTE discussed about each department's internship program for its undergraduate and graduate students. NIE students have an international option for one of their practicums within their stay at NIE. The second meeting was mainly focused on the Fukui Cluster OECD ISN research collaboration project which had started two years ago. Moreover, both universities shared some of their lesson study projects with its partner schools.



On March 8, we were privileged to be invited to participate at the very first open lesson study class of Jurongville Secondary School (JSS). We were warmly welcome by Madam Flora Ong, their principal. Ms. Heidi opened her English class which was about revising language errors collaboratively to more than 30 educators including us. Before heading to the classroom, they had given the participants a background of the class and students' prior knowledge. After the class, a

post lesson discussion was led by Prof Lee and Ms. Heidi. The teachers looked into the whole class discussion, the pair work, and student engagement. DPDT was also invited to share our ideas and to comment about the general structure of their version of lesson study. Miyashita sensei commended the teacher for her interesting class, and shared how DPDT focuses on students verbal and nonverbal dispositions during class observations. After a sumptuous lunch, DPDT and Madam Flora discussed possibilities of future collaboration between Jurongville and some schools in Fukui.

The last day of the first trip was a visit at Sembawang Primary School (SPS) at the northern part of Singapore where we were warmly welcomed by Madam Grace Lee, the principal, and by energetic kids. SPS pride themselves for capitalizing on the diversity among its students and for also being an ECO-friendly school. Indeed, we were toured around the campus with



different kinds of gardens inside and outside the buildings. We also saw Primary 1 Mathematics class, Primary 4 Music class, and two different groups of Primary 5 English classes. The math teacher was down on the floor with the kids during the class; the music teacher utilized chanting in making students move around; the English teachers had differentiated their pedagogies to attend to the kids' readiness. Over

lunch, we were able to meet more teachers and discuss with them their school activities, in particular, the students' integrated learning projects. DPDT professors were also impressed by how caring and sensitive SPS' teachers are to their students.



The second trip was on March 27 to 29, 2017. This time, Hanbara sensei, Endo sensei and myself were joined by three students from Wakasa High School (WHS), two teachers of WHS, and one teacher from Fuzoku Junior High School (Fuzoku). The main goal of this trip was to strengthen the collaboration between Fukui schools and Singapore schools, and establish new ones too. On March 27 and 28, the three students from WHS worked with five students of Temasek Junior College (TJC) on their micro plastic experiment. On the first day, students went to the beach to gather data samples and dried those at the laboratory for the next part of the experiment the following day. Students did not just do the experiment that day; they were also able to bond as they had lunch together in a nearby hawker center and was left to have snacks while the teachers had their own meetings. After completing the experiment on the second day, students did a focused small group discussion on the effects of plastics on marine animals — and its possible effects on human beings too. WHS students led the discussion by sharing their general goals of their international project. The visit to TJC was

ended with a meaningful and productive discussion between the teacher — working on a more robust framework for future collaboration.

On the last day of the second trip, we visited Jurongville Secondary School again and had a closer discussion about collaboration possibilities between Fuzoku and JSS students. We were able to learn about JSS' Learning for Life Program through Sports and its Character and Citizenship Education. Madam Flora also shared with us their various international program experiences, and we explored possible ways to collaborate. We were also toured around the school — visiting the faculty room, gymnasiums, open areas, field and the room for those who need extra attention. We were also able to observe a career class that Madam Flora co-teach. That day, students were asked to write down their dream schools and dream careers. Students were also elaborating on the pros and cons of their choices.



The visit to Singapore was very informative and productive. We were able to get a glimpse of some of their classes from elementary to the university level. It was equally meaningful to listen to Fukui and Singapore teachers discuss about learning and projects. But my favorite part was observing the dynamics between the students of WHS and TJC as they work together trying to make meaning out of the activity and break language barriers.

シンガポールの教育に触れて

福井大学教育学部附属義務教育学校 松田 ひとみ

4月より、本校は「義務教育学校」として9カ年の小中一貫教育をスタートさせた。特色ある教育の

1つとして「世界とつながるグローバル教育」を掲げ、9カ年かけて実生活で使える英語を習得する他、

海外の学校と提携し、スカイプを活用しての日常的な対話等を通して、英語力だけでなく、これから求められるグローバル感覚を磨くことを目指している。

3月末、義務教育学校開校にあたり、グローバル教育を進めるべく、海外提携校の視察の為、教職大学院の半原先生、遠藤先生、ポリンさんらと共に、シンガポールを訪れた。シンガポールと言えば、世界で最も優れた教育先進国の1つである。義務教育をスタートしてまだ10年ほどしか経っていないにも関わらず、OECDによる学習到達度評価(PISA)(2015年実施)において、数学的リテラシー、科学的リテラシー、読解力の全てにおいて1位を獲得するほどの高い学力を有している。しかも、レベル5以上の生徒の割合も1位である。そのような国の教育がどのように行われているか、とても関心があった。

シンガポールでは、Temasek junior college と Jurongville secondary school の2校を訪問した。2校に共通して感心したのは、どの生徒も熱心に学習していたことだ。皆、学校が好きで、友達と楽しく学び、将来に向かって真っすぐに伸びている印象を持った。

最初に訪れた Temasek junior college では、若狭高校の生徒たちと Temasek の生徒たちが共に、マイクロプラスチックの実験を行う様子や、今後どのように若狭高校と Temasek が協働していけるかについて、教師が話し合う様子を見せていただいた。マイクロプラスチックの実験では、実際に海岸へ行き、若狭の生徒が Temasek の生徒に実験の方法をプレゼンし、砂浜にあるプラスチックを採取した。学校に戻り、今回の実験を通して感じたことや今後の方向性について、お互いに伝えあった。若狭の生徒たちが英語で必死に伝えようとする様子から、Temasek の生徒たちも何かを感じとってくれたに違いない。一方、教員会議では、若狭の取り組みを紹介する際、牡蠣にマイクロプラスチックを食べさせ、それが自然に牡蠣から排出されるか実験をした、ということ伝えると、Temasek 側の教員陣の顔がみるみるうちに厳しい表情になり、「おや?」と思う場面があった。後から聞くと、シンガポールでは、どんな小さな生物実験でも、それを行った者は罰せられる、とのことで、それを学校で、しかも授業で行うとは何事!?といった感じだったようだ。その後、

牡蠣の件は特に協働に盛り込まず、お互い、継続的にマイクロプラスチックの実験をそれぞれ行っていきましょうということに落ち着いた。グローバルな協働展開をする際には、相手国の事情もよく理解し、受け入れなければならないと思った。

次に訪れた Jurongville secondary school は、生徒数1000人以上の大きな学校で、部活動の大変盛んな学校である。本校との連携の可能性について話をしながら、校長先生に校内を案内していただいた。ロの字の校舎の中庭には、校訓である P R I D E の文字。それぞれの文字の意味は、P=Perseverance, R=Respect, I=Integrity, D=Discipline, E=excellence である。本校の校訓である「自主協同」にも通じる部分があり、また、Jurongville の生徒も本校の生徒と雰囲気似ていて、とてもものびのびとしていた。Jurongville の訪問では、校長先生によるキャリア教育の授業を見せていただいた。(校長先生が授業をするなんて!とかなり驚いた。)授業では、これでもかというほど、生徒たちに「あなたたちには可能性がある!やればできる!」というメッセージを投げかけていた。ワークシートに自分の得意とすることや良いところ、目標(学習に関する1年の目標や進学希望先はもちろん、希望の職業も)を書く。ある生徒は、自分の良いところは、誰にでも心を開き、常に優れていたいと思いつつ何かをしていることで、宇宙工学に興味があり、ジュニアカレッジに進みたいと言っていた。日本の15歳と少し違うと感じたのは、皆、はっきりとした目標もっている点だ。小学校卒業時点で卒業試験があり、中学から進学コースが決定しているせいもあるかもしれない。シンガポールでは、日々、子どもたちが夢に向かって熱心に学習している。キラキラした目の生徒たちを見ながら、Jurongville の生徒たちと本校の生徒たちが交流する様子を思い浮かべていた。

現在、英語の授業でのスカイプを検討中で、そこから他の教科等でもグローバルな展開ができれば、と考えている。

今回のシンガポール訪問では、日本以外の教育を実際に見ることで、自分の視野が広がった。また、PBLやキャリア教育が世界的な動きであるということを実際に確かめることができた。今回得たことを日々の教育活動に生かしていきたい。

テマセックジュニアカレッジ訪問の報告

若狭高等学校 高橋慧

- ・生徒の共同研究
訪問初日に本校生徒からマイクロプラスチックに

よる汚染問題の概要と日本での調査結果をまとめたプレゼンテーションを行ったうえで、TJC 近隣のビー

チにて調査を行った。本校生徒がリードしながら TJC の生徒が実際の操作を行うという形式で実験サンプルの収集を終えた。実験室へ持ち帰り、2 日目にかけて続きの過程を済ませシンガポールイーストコートビーチでの調査結果をまとめた。プラスチックと木片や海藻などの見分け方のコツなど、基本的な操作以外の部分でもやりとりしながら協働的に一連の実験を終えた。また、同様の調査を 4 月、5 月と月ごとに継続してもらえる約束を得た。

・教員会議の結果

本校とテマセックジニアカレッジ (以下 TJC) は共に課題研究 (本校: 探究科学/海洋探究科学, TJC: Project Based Learning) を行っており、双方に共通したテーマであるマイクロプラスチックをきっかけに連携をスタートしようとしている。3 月に訪問したが、シンガポールでは 1 月から新年度に入っているため、今年度中 (17 年の 12 月まで) は授業内での連携はほとんど不可能とのこと。しかし、昨年マイクロプラスチックで関わった 5 人を何とか使って連携を進めるとの返事をいただいた。その上で、カリキュラムベースを再検討し、18 年 1 月から実施できる具体的な連携計画が出来上がった。

会議を踏まえて、日本とシンガポールの課題研究の位置づけが全く異なり、それに伴って生徒へのアプローチも差が大きいことを痛感した。現在本校で行っている課題研究はテーマ設定から研究手法開発まで、あくまで生徒が主体的に活動することが前提であり、育成すべき力の中からうまく引き延ばせそうな部分を特化して指導している。対してシンガポールでは、育成すべき力を養うことができる研究で

なければ着手できないという様子である。評価に関しても、生徒がありのままで見せるパフォーマンスをとらえる本校に対して、TJC では生徒が一番良い姿を見せるチャンスを与えなければならないという意識が強かった。学校へ持ち帰り課題研究担当者で検討したところ、パフォーマンス評価の目的が教員の指導を振り返るものなのか、生徒に評価をつけることなのかによって扱いに大きな差が生まれるのだという結論に落ち着いた。

このように、同じ課題研究で同じテーマを扱い、もちろん教育的な目的もほとんど同じでパフォーマンス評価を使っているが、教育精度や環境の違いによって教員の意識や指導方法にここまでの差が生まれることに非常に驚いた。

・OECDISN の発表会について

8 月の発表に向けて、今年度動けないため、以下の 3 本柱で進めることになりました。

1. これまでの取り組みの改善策の提案と 18 年度以降の連携計画を提示することで 8 月の発表とすること。TJC は 14 歳、本校は 17 歳と年齢を超えた連携のあり方の提案
2. 探究学習のための国際的なルーブリックの開発
3. 生徒のメタ認知の形成のさせ方

特に 18 年度の連携計画を詰めていくため、基本的に週 1 回の通信 (メールやスカイプ) というルールを作った。第 1 回は 4 月 6 日までにこれまでの連携失敗の経緯と、上記 1, 2, 3 についての各校の原案提示をするという課題を共有し、来月第 1 回の連携会議を行う。

ISN 報告

プロジェクト学習に関する先進校視察を通して

福井県立羽水高等学校 永田 卓裕 小林 咲花

1. 目的

福井大学教職大学院と羽水高校との連携協働による OECD ISN に関わるプロジェクト学習のカリキュラム開発や各教科における授業改善を推進するために、課題解決型学習、地域連携型学習およびアクティブラーニングなどに取り組む先進校を訪問し、取り組みの実際を視察する。

2. 視察内容

- (1) 課題探究型 (プロジェクト学習) のカリキュラム開発について
- (2) 地域と連携した学習の取り組みについて
- (3) ICT を取り入れたアクティブラーニングの充実について
- (4) 教師の授業力向上のための研修について

3. 岡山県立倉敷南高校について



平成19年度から単位制を実施している普通科高校であり、今年度の生徒数は957名（1学年8クラス）である。また、単位制導入と同年に、文部科学省から「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究実践校」に指定されて以来、校内にキャリア教育支援室を設置し、継続的・発展的にキャリア教育を実践している。

3.1 「倉敷町衆プロジェクト」

倉敷南高校が進めるキャリア教育の核となっているのが、「倉敷町衆プロジェクト」である。Think Locally, Act Globally の理念に基づき、3年間を通して「21世紀型能力」の育成に取り組んでいる。また、倉敷駅から学校までの間に倉敷の商店街や博物館などの観光地、そして市役所がある。そのため、生徒の多くが毎日登下校時に通っている町そのものが学習フィールドになっている。

○町衆連との連携

「町衆プロジェクト」は、博物館・企業・青年会議所などが集まり構成されている「町衆連」のの協力を得た学習が主体となっている。特に1年次の学習では、町衆連の方々による出前講座（7月中旬）や、生徒が倉敷市内の企業や施設などを訪問し、それぞれの企業や施設が抱える課題や現在の取り組みについて話し合う機会を設けている。これらの活動の目的は、課題設定能力の育成であり、倉敷の「生の情報」をやり取りする中で、表面的な理解ではなく、実社会の状況に基づいたより真正なものになる。課題設定の視点やまた情報の分析方法などについて1年次に理解することで、2年次に行う課題研究の素地を育成している。

○学びの環境整備

倉敷南高校の図書室には、岡山県や倉敷市についての文献を集めた特設コーナーが作られている。生徒たちが必要に応じて情報収集ができるよう環境が整備されており、歴史、環境、統計データなどがきちんと整理整頓されている。先述した通り倉敷南高校は大規模校であり、その学校規模は羽水高校とほぼ同等である。本校での情報収集作業はパソコン教室を利用することが多く、生徒数に対するパソコン台数は充分ではない。倉敷南高校でも同様の課題を

解決するべく、図書部が主体となり地域に関するコーナーを新設した。また、その一角には探究学習に関する書籍など、探究学習に携わる教員のためのスペースも作られていた。生徒だけでなく、教員が利用できる学びの環境を整備する必要性を強く感じた。

写真・図書室の様子



○探究学習のサイクル

倉敷南の探究学習では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」のサイク

ルが何度も連続するように設定されている。1年次の町衆プロジェクトでは、先述した通り、町衆連の方との意見交換会を複数回設けている。また、2年次の探求学習「キャリアI」（学校設定科目、週1単位、火曜7限実施、生徒が自分の希望進路に応じて15の講座のうち1つを選択）では、1年間かけて学問探究レポートを作成する過程の中で定期的に生徒たちが自分のアイデアを様々な人たちに発表する機会（年間6回）を設けている。外部からのフィードバックを生かし自分たちの論文を更に深める過程を繰り返すことで、最終的にできあがる論文（レポート提出）では初期に比べかなり深いものができあがる。

○進路指導との連携

倉敷南高校では、「21世紀型能力」ルーブリックを作成し、各学年で継続して調査することで、生徒個人の3年間の資質・能力を細かく分析している。また、どのような活動を通して身につけた能力なのかについても、全て記録する。これは、生徒が自らの学習を詳細に振り返り、3年間の学習を基に大学などの志望理由書作成や面接練習を行う際に

大いに活用されるものである。探究学習と進路指導の連携の一つの形としていえるかもしれないが、各校の実態に応じたルーブリック作りが重要になるであろう。

倉敷南高校「21世紀型能力ルーブリック」

4. 岡山県立林野高校について

岡山県の北部山間地に位置する普通科高校（全校生徒387名、1学年6クラス）。元々は家政科や定時制も設置していたが、地域の過疎化に伴う学校統廃合により平成19年度より現在の体制となった。平成25年度にはユネスコスクールに加盟し、「持続発展可能な社会の実現のための教育」(ESD)を教育理念とした「マイドリームプロジェクト」(MDP)を総合的な学習の時間に実施している。MDPでは、地域の方々を講師とした出前授業や学校周辺地域に出かけてのフィールドリサーチ（デアイ場）を行ったり、その学習成果を実践する場として「むかし倉敷ふれあい祭り」を地域の方々と共同で開催したりしている。また、ICTを活用した学習にも積極的に取り組み、平成28年度からGoogleと協力し「Chromebook」および「G Suite」の本格導入への準備を進めている。



4.1 My Dream Project (MDP)

○カリキュラムの工夫

林野高校では、総合的な学習の時間（年間1単位）とロングホームルーム（年間1単位）を隔週で実施している。これにより、2週間に1度 MDP の時間を2時間連続（火曜日6・7限目）で確保できている。これにより、校内での学習がより効率的になるだけでなく、校外でのフィールドリサーチを実施しやすくなっている。

○縦割りのグループ編成

探究学習を行うグループは、同学年や同クラス内で編成するのが一般的であろう。しかし、MDPでは同じグループ内に3学年それぞれから6～8名の生徒が集まっている。年度当初に2・3年生がグループごとに昨年の学習成果を1年生にプレゼンテーションし、1年生はそれを参考に自分が参加するグループを選ぶ。これにより、1年生は自分の興味・関心に合った学習内容を選択でき、また同時に1年間の学習目標を具体的にイメージすることができる。

グループ内では2年生はリーダー、3年生はアドバイザーという立場で参加し、前年度までの自分たちの学習内容・方略を後輩たちの学習に受け継いでいく体制ができている。また、このグループ作りは、生徒だけでなく教員が学年の垣根を越えてMDPに取り組むことを促し、学校全体でMDPに取り組むということ意識づけるものである。

○生徒のアイディアを発信する場

MDPの活動は、「地域に学ぶ・地域を学ぶ」ことを目標にし、地域がかかえる課題について真剣に考える。しかし、ただ考えレポートという形で終わるのではなく、9月には「むかし倉敷ふれあい祭り」で自分たちが考えた解決策を提案する。祭りという場を発表の場として活用することで、

より幅広い地域住民から意見を得ることができ、生徒たちの学習に「生の声」を取り入れることができている。

4.2 協同学習のための環境整備

林野高校では、MDPだけでなく、各教科の普通の授業から協同学習を取り入れている。その準備として、次の2つ取り組みが特に印象的であった。1つめは教室のICT機器の充実である。林野高校では全ての普通教室に短焦点プロジェクターを整備している（平成24年度～）。これにより、機材準備にかかる時間・負担を大幅に軽減し、各教員が気軽にICTを活用することができている。ICTを使うことで、教員からの板書や説明にかかる時間は短縮され、その浮いた時間を生徒同士の話し合いなどの時間に費やしている。



各教室に設置されたプロジェクターとスクリーン

G Suite の活用例



2つ目は、クラウド型グループウェア G Suite の導入である。これは先述した Google と協力した取り組みであり、まだ試行段階である。その中でも、先進的な取り組みを行っている岡堂教諭（英語科）は、授業をパソコン教室で行い、G Suite で生徒からの回答をリアルタイムで集計しクラス全体でシェアしている。また、スマートフォンからもアクセスが可能のため、家庭学習課題の提出も同様な形をとっている。セキュリィーなど色々な面で課題はあるものの、岡堂教諭は「生徒たちは SNS でやり取りするような感覚で授業や課題に取り組み、動機付けとしても効果はあったし、教員側としても提出状況の管理などがしやすい」と話していた。

5. まとめ

今回の視察を通して明らかになった本校の課題は以下の通りである。

5. 1 学年・教員の垣根を越えた取り組み

探究学習を立ち上げた今、本校では今後の継続性を考えたカリキュラム開発が課題となっている。今回視察した2校のように、3学年で一貫した学習内容はもちろんのこと、生徒も教員も学年などの垣根を越え、学校全体で取り組むという共通認識を生み出すことが必要だろう。

5. 2 学習環境の整備

ICT 機器の導入や整備には、多くの資金がかかる。しかし、図書室に探究学習に関するコーナーを作るなどのより身近な環境整備から始めることは可能であろう。

5. 3 地域との連携強化

今回視察した2校は、校外の学習の場が非常に具体的に設定されていた。特に、生徒にとって身近な場所であり、また学習に積極的に参加してもらうことのできる地域とのつながりが印象的であった。現在本校では福井市役所と連携した学習を進めているが、地理的にも課題の視点としても、地域のどの部分に目を向けるのかをより具体化することが必要だと感じた。

今回の視察を通して得た知見を生かし、本校の取り組みをより良いものにしていきたい。

世界の教師教育

Teacher Professional Learning in the Australian Capital Territory (ACT)

Christie Abel

In Australia it is the responsibility of each state/territory to fund and regulate the school system. Thus, the requirements and structures for teacher professional learning differ slightly from state to state. This information relates to teacher professional learning in the Australian Capital Territory.

Teacher qualification and registration

There are 3 common pathways taken to become a qualified teacher in Australian schools

1. Complete a 4 year undergraduate teacher education degree.
2. If you are already at university or have completed a degree, you can complete a 1-2 year postgraduate qualification
3. If you have industry experience there is another pathway for secondary teaching, Teach For Australia currently supports people to transfer into a teaching career through on the job training and intensive education seminars throughout the year. Teach for Australia

participants are placed to support schools in low socioeconomic areas.

Each state/territory has a body responsible for the registration of teachers. Once registered, teachers must keep their registration current in order to be able to work in schools.

In the ACT, for a teacher to keep their registration current, they must have completed 20 hours of professional development over the course of the previous year. This professional learning is divided into two groups; accredited programs and teacher identified professional learning. Teachers must complete their 20 hours by doing at least 5 hours of accredited programs and at least 5 hours of teacher identified professional learning. The remaining 10 hours can be either accredited or teacher identified as the individual wishes.

Accredited programs are registered with the ACT Teacher Quality Institute (the teacher registration body) and are usually run by the Education Department or other external providers. These are usually conferences, seminars and workshops.

Teacher identified professional learning includes: formal academic study, formal action research, non-accredited programs and conferences, online learning, professional collaborative projects, professional reading and online professional collaboration.

At the beginning of each school year, teachers complete two days of professional learning activities organized by their school under the direction of the Department of Education. Often these days consist of accredited programs, conferences and seminars which complete the yearly requirements for registration.

This leaves teachers free to complete professional learning in their own area of interest and mode of study throughout the year. As of 2014, as a directive of the Department of Education, teachers should also participate in a scheduled Professional Learning Community. These take different forms, depending on the schools, however many schools are implementing Professional Learning Communities as formal action research groups, as this can also be registered as teacher identified professional learning.

Below are two examples of Professional Learning Communities in the ACT school system.

Name	Japanese Teachers Professional Learning Community	Dickson College Professional Learning Community
Members	6-8 Japanese language teachers from schools in the north-east of Canberra	Groups of 3-8 staff who are interested in researching similar topics
Aims	To provide a support network for Japanese language teachers. To reflect on and improve teaching and learning in the language classroom	To complete an action research project within a professional learning community To improve the quality of teaching and learning at Dickson College

<p>Group Structure</p>	<p>Began in 2013</p> <p>Meet 8 times a year, twice per term</p> <p>Meeting structure</p> <ul style="list-style-type: none"> · One member presents a problem or an area of their teaching they would like to focus on · Other members have some time to ask questions to bring about reflection on the topic · All work together to create something to address the topic, if required. · Each member has a turn to introduce the topic over the year <p>Starting in 2016, one meeting has been replaced by cross school observation visits. During these observations</p> <ul style="list-style-type: none"> · The teacher sets an area of concern/development which they would like to focus on · Observer focuses on this topic during the observation · The day after (or sooner) the observer shares their thoughts and the two teachers reflect together on the process 	<p>Began 2016</p> <p>Meet 8-12 times per year, 2-3 times per term</p> <p>Groups plan and carry out action research on a mutually agreed topic over the school year</p> <p>Findings reported to the whole staff at the end of the year</p> <p>Examples of topics are</p> <ul style="list-style-type: none"> · Assessing the impact of student self-assessment to improve their engagement · Would tailor-made packages support students to succeed at college? · What makes students self-motivated to learn Math? <p>Groups are encouraged to collect and analyze data</p> <p>Class observations are not essential but may be useful for some groups</p>
-------------------------------	---	---

When teachers complete professional learning, they must record and submit their learning to the teacher licensing body. This process aims to support teachers to reflect on what they have learnt and also to plan future learning that matches their goals. It has been interesting to observe the different role that reflection plays in teacher professional learning in Fukui. There are certainly aspects of the Fukui model of collaboration, learning and reflection which would enhance the experience of teachers in Canberra.

Schedule

7/8 Sat 合同カンファレンス (A日程)

7/15 Sat 合同カンファレンス (B日程)

福井大学教職大学院 夏期説明会



平成29年

8月5日(土) 13:00~

13:00からの全体説明のあと、概ね14:00から個別相談となります。

福井大学文京キャンパス
アカデミーホール 集会室



教職開発専攻

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

福井大学教職大学院は、平成30年4月の
連合教職開発研究科としてのスタートに
向け、現在準備を進めています。

平成30年度第1回 学生募集日程

出願期間：11月 6日(月)~11月 9日(木)

試験日：11月25日(土)

合格発表：12月 5日(火)

小学校教員免許取得プログラム

長期インターンシップを活かし、3年間で必要単位を取得すれば、小学校教諭1種免許状が取得できます。

課程を修了すると、小学校1種免許状が専修免許になります。

授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入することになります。

(注)教職大学院では、中学校等の教育職員免許状を取得していることを前提としています。
(条件については、事前にお問い合わせ下さい。)

出願を考えている方、関心のある方は、お気軽に以下へご連絡ください。

福井大学学務部入試課

TEL: 0776-27-9927 E-mail: g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

※氏名・電話番号・所属、志望専攻およびコースをお知らせ下さい。

創造力、実践力。

国立大学法人



【編集後記】教職大学院の出発とともにスタートしたこのNewsletterが、この度100号を迎えることとなりました。一人ひとりの実践者が自分自身の実践の歩みを記し省察するため、そしてそれを広く共有するためのNewsletterですが、その歩みを迎えることは、教職大学院そのものの歩みを迎えることでもあります。このNewsletter No.100が、今後の教職大学院の新たな展望を拓く媒体となることを願います。(笹原)

教職大学院 Newsletter **No.100**

2017.7.8 内報版発行

2017.8.17 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp